○明治十五年(紀元二五四二年)八月。避病院ヘ入院志願ノ者、自分都合ニ由リテハ巡査ノ護送ヲ要セザル旨ヲ告示ス。從前避病院消毒所・火葬場其他檢疫視察監督ノ爲本局委員ヲ巡回セシメシニ有リシカ、今後更ニ幹事及委員ニ於テ消毒所幷火葬場實況視察ノ爲、時々巡回スル事ニ定ム。十二日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。本郷○市内。避病院ヲ置キ、明十三日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。開院ノ旨ヲ告示ス。日本橋區○市内。檢疫醫出張所ヲ置ク。衞生局東京司藥場ニ委囑シテ神田上水ヲ試驗セシム。十三日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。本郷○市内。避病院ヲ開ク。十四日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。病勢益猖獗、漸ク六郡ニ蔓延セントスルノ兆アルヲ以テ、地方稅豫防費ノ内ヨリ各郡協議費ヲ補助セシメ、各郡ヲシテ一層豫防消毒法ニ注意セシメント東京府知事ニ照會シ、常置委員ノ諮詢ヲ經テ、其旨ヲ各郡々役所・戶長役場ニ達ス。又防臭藥交付ノ義ヲ各區役所ニ達ス。十五日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。芝○市内。避病院構内ノ井水ヲ分拆試驗ス。十六日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。虎列刺患者取扱手續及消毒法實施上監督ノ爲、本局々員時々出張ノ旨ヲ各警察署ニ達ス。二十日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。更ニ避病院規則幷職務心得ヲ改正ス。二十一日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。大久保○武藏國豐多摩郡。避病院構内ノ井水ヲ分拆試驗ス。二十二日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。府下石炭酸水販賣所僅少ナルニ由リ、衞生局製藥所ニ製造ヲ依托シ、各郡役所ニ於テ賣捌カシメ、本局ヨリ其旨ヲ報告ス。二十五日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。芝區○市内。檢疫醫出張所ヲ置ク。二十六日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。本局ノ建議ヲ採納セラレ、太政官第四十七號ヲ以テ當分病名票貼付ヲ實施セサル旨ヲ布告セラル。吐瀉ノ二症ヲ兼備セル患者ヲ診察シタルトキハ、主治醫ヨリ家人ニ懇諭シテ消毒法ヲ施行セシメ、且ツ警察署ヘ屆出ヘキ旨ヲ開業醫ニ告示ス。二十九日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。單ニ下利症アル者ト雖、主治醫ヨリ其家人ニ懇諭シ、消毒法ヲ行ハシムヘキ旨ヲ開業醫ニ告示ス。三十日○明治十五年(紀元二五四二年)八月。消毒所出張員處務心得及火葬場出張員心得ヲ定ム。神田區○市内。虎列刺患者俄ニ增加ノ原因ハ鮪鰯等ヲ食セシ者多キニ由リ、此際右魚類ノ食用幷販賣者共精々注意スベキ旨ヲ告示ス。九月二日○明治十五年(紀元二五四二年)。坂本町○市内。避病院ヲ置キ、明三日○明治十五年(紀元二五四二年)九月。開院ノ旨ヲ告示ス。三日○明治十五年(紀元二五四二年)九月。坂本町○市内。避病院ヲ開ク。本年太政官第四十八號布告傳染病豫防規則第十四條追加ノ一項目下施行ノ旨ヲ告示ス。虎列刺病最猖獗ノ區、即神田・日本橋ノ兩區○市内。ヘ本局委員ヲ出張セシメ、各差配人ヲ招集シテ該病隱蔽ノ

害アル豫防法ノ忽ニスヘカラサル旨ヲ演諭セシム。五日〇明治十五年(紀元二五四二年)九月。消毒法實地施行上監督ノ爲、本局委員出張ノ旨ヲ各郡役所・戸長役場ニ達ス。神田・玉川兩上水々源巡視ノ爲、本局幹事長及幹事神奈川縣下ニ出張ス。八日〇明治十五年(紀元二五四二年)九月。虎列刺病ニ對シ、他ノ名稱(痧病・瘟毒痢ノ類)ヲ以テ屆出ルハ豫防法施行上不都合ニ付、明治十三年第三十四號布告傳染病豫防規則ニ記載セル病名ニ從ヒ、虎列刺ノ名稱ヲ以テ屆出ヘキ旨ヲ開業醫ニ告示ス。是日〇明治十五年(紀元二五四二年)九月八日。警視廳ヨリ病勢衰退ニ付諸興行解停ノ旨通知アリ。二十日〇明治十五年(紀元二五四二年)九月。虎列刺病豫防法實施ノ景況視察ノ爲、本局委員ヲ玉川上水近傍ノ村落ニ巡回セシム。神田區〇市内。檢疫醫出張所ヲ廢ス。二十一日〇明治十五年(紀元二五四二年)九月。大久保〇武藏國豐多摩郡。避病院ヲ閉鎖ス。二十五日〇明治十五年(紀元二五四二年)九月。病勢退縮ニ付、石炭酸水ノ拂下ヲ止メ、其旨ヲ報告ス。深川區〇市内。檢疫醫出張所ヲ廢ス。三十日〇明治十五年(紀元二五四二年)九月。芝〇市内。避病院ヲ閉鎖ス。十月三日〇明治十五年(紀元二五四二年)。虎列刺病ノ流行即今終熄ニ際シ、餘毒ヲ掃蕩センガ爲、溝渠・下水等浚渫スヘキ旨ヲ各區役所及品川〇武藏國荏原郡。・内藤新宿〇武藏國豐多摩郡。・下板橋〇武藏國北豐島郡。・千住〇武藏國南足立郡。ノ四宿驛所管ノ郡役所ニ達ス。七日〇明治十五年(紀元二五四二年)十月。阪本町〇市内。避病院ヲ閉鎖ス。十日〇明治十五年(紀元二五四二年)十月。虎列刺病殆終熄ニ付本局閉鎖ノ義ヲ内務卿ニ上申ス。傳染病豫防規則第十四條追加ノ一項施行相止ムル旨ヲ告示ス。本郷〇市内。避病院ヲ閉鎖ス。十二日〇明治十五年(紀元二五四二年)十月。内務卿ヨリ明十三日〇明治十五年(紀元二五四二年)十月。本局ヲ閉鎖スヘキ旨ヲ達セラル、因リテ之ヲ告示シ、陸海軍及印刷局ニ通知シ、且警察署及郡役所ヘ、殘務ノ義ハ、當分ノ内東京檢疫局跡ニテ取扱、檢疫等ニ係ル事務ハ都テ從前ノ通タルヘシ、且虎列刺病者有之節ハ、當分ノ中從前ノ手續ヲ以テ、本所〇市内。避病院ヘ送附スヘキ旨ヲ達ス。十三日〇明治十五年(紀元二五四二年)十月。本局ヲ閉鎖シ、從前ノ委員ヲメ殘務ヲ取扱ハシム。本所〇市内。避病院ヲ閉鎖ス。但入院患者ヲ取扱ハシムルヿ故ノ如シ。虎列刺病流行紀事概略ヲ蒐錄シ、宮内省・内務省及警視廳・東京府ニ申報ス。十四日〇明治十五年(紀元二五四二年)十月。溝渠・下水浚渫ノ義ニ付檢疫掛殘務取扱員ヲメ各郡區役所ニ協議シ、汚泥運搬人夫運搬船ヲ監督指揮セシムルヿニ定ム。十八日〇明治十五年(紀元二五四二年)十月。溝渠・下水浚渫ニ着手ス。三十一日〇明治十五年(紀元二五四二年)十月。溝渠・下水浚渫ヲ除クノ他、警視廳・東京府兩廳ヘ各主管ニ依リ事務ヲ引繼ク。十二月二十五日〇明治十五年(紀元二五四二年)。溝渠・下水浚渫ヲ

完了ス。

此疫府下ノ死者總計五千七十一人、內市部四千四百四十三人ナルコト、既記ノ如シ。東京府統計書ニハ、五千六十三人ニ作リ、患者、麴町區○市內。二百七十七人、神田區○市內。九百七十八人、日本橋區○市內。千九十一人、芝區○市內。五百五十六人、麻布區○市內。九十三人、赤坂區○市內。五十八人、四谷區○市內。五十八人、牛込區○市內。百十一人、小石川區○市內。八十一人、本郷區○市內。二百九十一人、下谷區○市內。三百十二人、淺草區○市內。五百五十人、本所區○市內。百廿一人、深川區○市內。三百六十三人、之ニ郡部ヲ合セテ總計六千五百二十八人（五○東京府衞生年報六千五百四十三人ニ作ル。）ナリト爲ス。

（參考）虎列刺病流行事蹟報告書云フ、

明治十四年（五○紀元二四一年。）乃至十五年（二○明治五四二年。）ノ流行（千八百八十一年乃至八十二年。）

明治十四年（五○紀元二四一年。）前半年間ハ、虎列刺若シクハ疑似症ノ屆ヲ出シタルモノ、全國僅カニ九十五人ノミナリシカ、七月（○明治元二十四五四年。）ヨリ十二月ニ至ル六ケ月ハ、屆出ノ患者總數九千二百九十四人アリキ。其前六ケ月間ニ屆出タル九十五人ノ患者ハ、其散在性ニシテ流行性ヲ呈セサルト、極メテ小數ナル等ヲ以テ之ヲ考フレハ、明治十一年（○紀元二五三八年。）ノ前半年ニ於ケ

ルカ如ク、眞性ノ虎列刺ニアラスト思考ス。然ルニ七月（○明治十四年元二五四一年。）以後ニ至リテ、大ニ流行性ヲ顯ハシタレモ、冬期ニ至リ幸ニ流行ノ勢ヲ挫キシカ、翌十五年（○明治二五四二年。）（○紀元二五四一年。）（千八百八十二年）ニ至リテ、再燃ノ兆アリテ、已ニ二月（○明治十五年元二五四二年。）（紀）ニ至リ、横濱（○武藏國。）ニ發シ、遂ニ流行ヲナスニ至レリ。其病毒傳來ノ經路ハ詳カナラサレモ、九州殊ニ長崎縣及熊本縣ニ流行シ、大阪府モ頗ル猖獗ヲ逞フシタルハ、病毒ノ初メ長崎（○肥前國。）ニ來リテ其地ニ流行シ、尋テ熊本縣、大阪府等傳染病ノ最モ屢々流行スル場所ニ輸入シテ、此流行ヲ來タセルヤ疑ヲ容レス。之ヲ海外虎列刺流行傳播ノ景況ニ對比スルニ、明治十四年（○紀元二五四一年。）（千八百八十一年）ハ恰モ虎列刺病ノ世界ニ蔓延セントスルノ初メニシテ、已ニ其前年（○明治十三年元二五四○年。）（紀）ニハ中央露國、及ウヲルカ河岸ノサラトヴ Saratov ニ小流行アリ。又八十一年（○明治十四年紀元二五四一）ニ至リテハ更ラニ西ニ進ミ、メツカ、シヱダー等ヲ犯シ、八十二年（○明治十五年元二五四二年。）（紀）ニハ埃及、メキシコ、八十三年（○明治十六年元二五四三年。）（紀）ニハ遂ニ歐洲ニ進入シタリ。故ニ明治十四年（○紀元二五四一年。）乃至十五年（○明治二五四二年。）ノ流行ハ、虎列刺ノ更ニ其鄕

國ヲ出テ、遠ク蔓延セントスルノ初メニ當リ。本邦モ遂ニ其餘波ノ災害ヲ蒙リタルモノナラン。

〔附記〕東京府統計書ニ據レバ、虎列刺病ノ外、明治十五年（紀元二五四二年。）中、東京ニ於ケル流行病、左ノ如シ。

附記　明治十五年腸窒扶斯其他

腸窒扶私	五九五。	發疹窒扶斯	四六。
實扶的里亞	二八〇。	天然痘	二。

明治十六年傳染病

明治十六年（紀元二五四三年。）中、東京府ニ於ケル傳染病患者ハ、腸窒扶私千卅五人ヲ最多トス、內區部患者九百六十八人也。此他ハ、

發疹窒扶私	一八。	赤痢	三八。
實扶的里亞	三二〇。		

明治十七年傳染病

明治十七年（紀元二五四四年。）中、東京府ニ於ケル傳染病患者ハ、

虎列刺	六四（區部五〇）。	腸窒扶私	七八二（區部六七二）。
赤痢	一八（區部一五）。	實扶的里亞	二七六（區部二二三）。
發疹窒扶私	一二（區部）。	天然痘	九（區部八）。

明治十八年麻疹

明治十八年（紀元二五四五年。）一月ヨリ三月ニ至リ、麻疹流行ス。〇麻疹年譜。疫邪流行年譜。醫林新誌。

明治十八年麻疹事蹟

明治十八年麻疹　傳フ、

明治拾八年乙酉（紀元二五四五年。）自一月至六月麻疹流行。

本年ノ疫モ、甲戌（明治六年（紀元二五三三年）。）ノ疫ト同シク純良ノ質ニテ、發疹モ早ク、收沒モ速カ也。二月三月尤モ盛ニ行ハル。四月ニ至リ大イニ衰ヘ、又五月ニ再盛ニナリヌ。始メ一二月ノ頃ハ、時嚴寒ノ候故ニ、溫覆ヨカリシカ、五月ニ至リテハ、溫覆スル能ハズ。爲ニ內攻スル者アリ。

疹患者四百拾五人ヲ治療ス。內男拾五人、女十八人、男兒百九十三人、女兒百八拾九人。（略。）下

當府（東京府。）下麻疹患者の届出たる分は、本年（明治十八年（紀元二五四五年）。）一月廿一日ヶ五月十五日まで、總數四万四千七百八十九人にして、此內男二万三千六百七十四人、女二万千百十五人なり、又此內死亡せし者は、五十九人にして、男三十三人、女廿六人なりしと。此他輕症にして醫藥もせず、爲に届け出さる分は、二三倍の多數なるへしと云ふ。（疫邪流行年譜ニハ「五月廿日ニハ、新患者ノ人モ届出シ。六月九十日兩日ニ男四人、女三人届アリシト云フ。」）

——醫林新誌（疫邪流行年譜同。）

附記　明治十八年傳染病

〔附記〕東京府統計書ニ據レハ、東京府ニ於ケル明治十八年（紀元二五四五年。）傳染病患者及死者、左ノ如シ。

帝都時代ノ疫癘

虎列刺患者　二四三（區部二二）。死者　一五九（區部一四〇）。　腸窒扶私患者　一〇六（區部九七）。死者　三五九（區部三二）。
發疹窒扶私患者　一六（區部）。　死者　一一（區部）。　赤痢患者　二七（區部二六）。死者　五（區部）。
實扶的里亞患者　三九（區部三〇二）。死者　二〇四（區部一七七）。　天然痘患者　六六六（區部五七七）。死者　一九〇（區部一六四）。

明治十九年虎列刺

十九年（明治二五四六年。紀元）七月、東京虎列刺病流行ス。蓋横濱（武藏國。）ヨリ傳染スル所也。八月（明治十九年元二五四六年。）ニ入リテ、俄ニ蔓衍ノ度ヲ高メ、三日（明治十九年二五四六年）八月。以後、日ニ百名以上ノ患者ヲ出シ、十八日（明治十九年紀元二五四六年）八月。ヨリ二百名以上、卅一日（明治十九年二五四六年）八月。ヨリ三百名以上ノ發病者有リ、以テ九月三日（明治十九年元二五四六年。）ニ至ル。其後九月中旬（明治十九年元二五四六年。）ニ及ヒ、始テ百名以下ニ下リ、次第ニ患者ヲ減ジ、十二月廿四日（明治十九年元二五四六年。）ヲ以テ止熄ス。府下ノ患者總數一萬二千百七十一人、死者九千八百七十九人也。（明治十九年虎列刺流行紀事。中央衛生會年報。東京府統計書。）

明治十九年腸窒扶斯

是年（明治十九年元二五四六年。）腸窒扶斯亦區部ニ於テ一千四百廿五人ノ患者ヲ出ス。（東京府統計書。）

明治十九年虎列刺事蹟

明治十九年虎列刺　ハ、流行系統歐洲ヨリ印度支那ニ移リ、進テ長崎（肥前國。）ニ入リ、以テ明治十八年（明治五四五年。紀元）十九年（明治二五四六年。紀元）ノ大流行ト爲リタル者ノ如ク、虎列刺病流行事蹟報告書（中央衛生會年報所收。）

明治十八年（明治五四五年。紀元二）乃至十九年（明治二五四六年。紀元）ノ流行ハ、本邦第五回ノ流行ニシテ、十八年（明治二五四五年。紀元）七月下旬長崎（肥前國。）ニ發生セシニ始マレリ。是ヨリ先八十四年（明治元二五四四年。紀元）ニハ、此病（虎列刺。）歐洲ニ流行シ、同八十五年（明治十八年紀元二五四五年。）ニ至ル迄、歐洲南部ノ各地ニ出沒シ、又千八百八十五年（明治十八年紀元二五四五年。）ニハ印度支那ノ各地ニ流行シ、而シテ清佛ノ戰端ヲ開クヤ、佛軍ノ牙營ハ、長崎（肥前國。）ト一葦水ヲ阻ツル澎湖島（澎湖島。）ニ在リテ、虎列刺ノ侵襲ニ遭ヒ、將士ノ之レニ罹ルモノ多カリシカ、明治十八年（紀元二五四五年。）七月中旬以降、此島ヨリ我長崎（肥前國。）ニ直航シ來レル佛艦「クトラムファント」號及ヒ「ローラント」號ヲ始メ、各國船艦相踵テ長崎港（肥前國。）ニ投錨シ、就中英佛ノ軍艦ヨリハ、水夫ノ死屍ヲ大浦山墓地（肥前國。）ニ埋葬スル丁數多アリ。而シテ其後長崎（肥前國。）ニ此病（虎列刺。）流行シ、遂ニ本邦各地ニ傳播シテ、一萬三千七百餘ノ患者ヲ出スニ至レリ。而ノ此年（明治十八年元二五四五年。）末ニ至リ、病勢大ニ衰退シタレ𪜈、翌明治十

九年〇紀元二五四六年。一月來若干人ノ患者ヲ出シテ漸ク增加蔓延、遂ニ明治十六年〇紀元二五四三年。以後ノ大流行ヲナスニ至レリ。

ト見ユ。而シテ其蔓延狀態左ノ如シ。

明治十九年(〇紀元二五四六年)虎列刺病ノ內地ニ蔓延ノ景況ハ、實ニ明治十二年(〇紀元二五三九年)以降ノ大流行ニ係リ、患者十五萬五千五百七十四人、內死亡十一萬〇〇八十六人アリ。全年チ通シ、患者ナキノ日ハ僅ニ十七日ニ過キス。而メ其病毒ハ全國ニ蔓延シ、三府四十一縣及ヒ北海道ニ至ルマテ、悉ク其害チ被フリ、就中大坂・石川・富山・東京・福井・新潟ノ如キ、最モ慘毒チ極メ、只鹿兒島・宮崎ノ二縣、及ヒ北海道ノ北部ノミ僅ニ流行チ免カレタリ、其流行傳播ノ系統ハ、未タ明ナル證跡チ得ル能ハズ。然レトモ本年(〇明治十九年紀元二五四六年)ノ病毒ハ、新タニ輸入シタルモノニ非ズ、前年(〇明治十八年紀元二五四五年)長崎(〇肥前國)ニ輸入シタル病毒チ大坂(〇攝津國)ニ持續シテ、之ヨリ四方ニ傳播シタルヤ、疑フ可ラサル事實ナリ。

大坂(〇攝津國)ハ前年(〇明治十八年紀元二五四五年)ノ秋、長崎(〇肥前國)ノ餘毒チ享ケ、流行月餘ニシテ、冱寒ノ候ニ及ヒ、一時終熄ニ傾クト雖、其毒全ク消滅スルニ至ラズ、絕エス市中(〇大坂)ニ一二ノ患者チ出タシ、終ニ延キテ本年(〇明治十九年紀元二五四六年)ニ及ボシ、一月二日(〇明治十九年紀元二五四六年)既ニ西南二區(〇攝津國)及ヒ堺區(〇和泉國)ニ於テ五名ノ新患者チ生シ、三日(〇明治十九年紀元二五四六年一月)西南北ノ三區・堺區(〇和泉國)ニ於テ亦五名アリ。斯ク日ニ數名ノ新患者チ出シ、時季漸ク溫暖ニ向フニ隨ヒ、漸ク患者ノ數チ增シ、四月(〇明治十九年紀元二五四六年)下旬終ニ全區ノ流行トナリ、以テ十月(〇明治十九年紀元二五四六年)下旬ニ至レリ。而メ一日新患者百名以上チ出タス「九十九日ノ久キニ涉リ、就中二百名以上ニ上レル」四日間、實ニ大坂(〇攝津國)近年未曾有ノ大流行タリ。蓋シ大坂(〇攝津國)ノ地タル、淀川チ引キテ市街縱橫ニ運河チ通シ、舟楫運遭ノ便チ藉ルノ外、一方ニハ下水溝トナリテ、家々惡水ノ排泄チ受ケ、一方ニハ上水ノ源トナリテ、人々飲料ノ供給ニ資ス。其井戸チ穿チテ其水チ用フルモノト雖、井戸ト運河トハ其水相交通シテ、多クハ同一ノ水平チ保チ、名ハ井水ナルモ、其實ハ河水ノ滲透セルモノナルカ故ニ、該府內ノ飲料水ハ、悉ク下水チ混淆セサルハナシ。故ニ一旦病毒ノ浸入スルヤ、物貨運輸ノ便ハ變シテ病毒傳播ノ利トナリ、十年(〇明治〇紀元二五三七年)以降、流行ノ都度每ニ、全國中最モ猖獗チ逞クスルノ場所トナレリ。殊ニ昨年(〇明治十八年紀元二五四五年)ハ、春來降雨多ク、六月(〇明治十八年紀元二五四五年)ニ至リ、遂ニ淀川流溢シテ市街ニ汎濫シ、土地家屋チ溺シ、非常ニ土壤ノ不潔チ加ヘ、病毒ノ培料チ備ヘタルノ後ニ於テ、長崎(〇肥前國)ヨリ輸入シタルモノ、本年(〇明治十九年紀元二五四六年)春夏復陽ノ時ニ及ヒテ、所在大ニ萌動シ、終ニ此大流行ニ至レルモノタルベシ。而メ大坂(〇攝津國)ノ地タル、全國販商ノ中心ニシテ、四通八達ノ交通チ有スルカ故ニ、終ニ全國流行ノ中心トナリ、凡ソ各地方ニ流傳スルモノ、其直接ト間接トニ別ナク、率ネ原チ大坂(〇攝津國)ニ取ラサルハナシ。

今全國流行ノ跡ニ就キ、其傳播ノ順序チ察スルニ、大坂(〇攝津國)ノ流行ニ先チ、德島・和歌山ノ二縣ニ於テ、一時流行ノ兆チ示セシカ、共ニ大流行ニ至ラズメ衰ヘ、其大坂(〇攝津國)ノ病勢漸ク盛ナルニ方リ、京都府ニ傳フル所ノ病毒忽チ萌發シ、五月一日

（○明治十九年紀元二五四六年）頃ハ、尚ホ點々三四ノ散發ニ過キサルモノ、九日（○明治十九年紀元二五四六年五月）ニ至リ、頓ニ流行性ニ陷リ、一日十八人ノ患者ヲ發スルニ至リ、其兵庫縣ニ傳フルモノハ、四月（○明治十九年紀元二五四六年）上旬ニ惡兆ヲ呈シ、京都ニ亞キテ流行性トナレリ。此時ニ於テ、和歌山縣ハ、遂ニ全管内ノ流行トナリ、德島亦再ヒ流行ヲ萠セリ。德島ハ幸ニ消滅ニ傾クト雖、愛媛・廣島ノ兩縣、海ヲ隔テ、一時ニ起リ、次テ岡山縣ニ及ヒ、同時ニ北方ニ傳ヘテ、遠ク富山ニ發シ、已ニ惡兆ヲ示セリ。六月（○明治十九年紀元二五四六年）下旬京攝ノ病勢益々熾ナルニ際シ、神奈川・山口、東西一時ニ發動シ、更ニ東海道三重・愛知ニ流傳ス。三重ノ病勢方ニ盛ナル頃、富山ノ病勢亦增進シ、七月（○明治十九年紀元二五四六年）中旬ハ、富山全管内ノ大流行トナリ、其性猛惡殆ント無前ノ勢トナレリ。下旬（○明治十九年紀元二五四六年七月）ニ至リ、神奈川ノ病毒ハ遂ニ東京ニ侵入シテ、實ニ安政（○紀元二五一四年―二五一九年）以降ノ大慘毒ヲ流シテ、千葉ニ及ブ。而シテ新潟ト石川トハ、富山ノ東西ニ起リ、島根ト福岡トハ、山口ノ南北ニ發ス。石川ニ續キテ福井ニ起リ、福岡ニ續キテ佐賀・長崎ニ傳ハリ、又大分ニ及フ。是ヨリ八月（○明治十九年紀元二五四六年）中旬ニ至ルノ際、南海高知ニ發シ、東北秋田・山形・函館・札幌ニ流傳シ、又山梨・長野ノ山間ニ起リ、埼玉・茨城・鳥取等相續キテ流行シ、群馬・岩手・福島・岐阜・靜岡等、亦多少ノ患者ヲ出タス。加之既發ノ地方ハ、依然其流行ヲ逞クシ、八月十九日（○明治十九年紀元二五四六年）ヨリ廿五日（○明治十九年紀元二五四六年八月）ニ至ル一週間ノ如キ、日々新患二千ヲ出タス。是實ニ全國大流行ノ極點タリ。而シテ三重・愛知・岡山・鳥取・埼玉・茨城・佐賀・和歌山ノ如キハ八月（○明治十九年紀元二五四六年）下旬ヨリ相續キテ稍々消熄ノ兆ヲ現ハシタルニモ拘ハラズ、病勢ハ深ク北方宮城・青森ニ進入シ、又西南海ヲ超エテ遠ク沖繩ニ及ヒ、寒熱ノ兩地遙ニ相應シテ運動ヲ同クシ、此時ニ及フモ中心タル大坂ハ依然猖獗ヲ逞クシ、尚ホ消熄ノ兆ヲ見ルコトナシ。九月（○明治十九年紀元二五四六年）下旬既ニ十有三萬ノ人體ヲ冒シ、八萬有餘ノ生靈ヲ殤シ、始メテ全國ノ病勢衰退シテ、毎日ノ新患千位ヲ下リ、秋田・山梨・札幌ハ殆ント終熄シ、高知・福岡・千葉・島根・長野・長崎ハ、稍々衰退ニ傾キ、十月（○明治十九年紀元二五四六年）ニ入リ、神奈川・東京・福井・函館・山形・京都・廣島・山口・新潟・大分ハ、中旬（○明治十九年紀元二五四六年十月）以前ニ衰ヘ、大坂・兵庫・愛媛・石川・富山・青森等、亦漸次ニ消熄シ、十一月（○明治十九年紀元二五四六年）ニ入リ、尚ホ宮城・沖繩ニ流行セシカ、宮城ハ其上旬（○明治十九年紀元二五四六年）上旬ニ至リ、始メテ消衰シ、十一月（○明治十九年紀元二五四六年）ニ、沖繩ハ十二月（○明治十九年紀元二五四六年）ニ至レリ。

東京府下ニ於ケル流行ハ、

○上略。横濱○武藏國。ノ病毒ハ、遂ニ東京ニ侵入シ、是ノ月（○明治十九年紀元二五四六年）七月。九日、日本橋區濱町三丁目○市內。ニ發スルモノト、同（○明治十九年紀元二五四六年）七月。十三日、本所區綠町一丁目○市內。又淺草區今戸町○市內。ニ發スルモノトハ、觸接交通及ヒ飲食物贈答等ノ媒介ニ依リ、病毒ヲ各所ニ散亂セシメ、實ニ今年（○明治十九年紀元二五四六年）。東京大流行ノ基ヲ爲スモノナリ。然レ𪜈是等ハ、流行ノ始ニ於テ其證跡ヲ認

メ得タルモノナルノミ、其他横濱○武藏國。ヨリシ、或ハ他ノ地方ヨリスルモノヽ如キ、素ヨリ多カルベシト雖、今之ヲ知ルニ由ナシ。中旬○明治十九年(紀元二五四六年)七月。先ツ京橋區○市內。ニ於テ流行ヲ始メ、日本橋區・本所區・深川區・淺草區○市內。ニ移リ、日々益〻惡兆ヲ呈セリ。○中略。

八月○明治十九年(紀元二五四六年)。ハ、本年○明治十九年(紀元二五四六年)。中、最モ流行ノ酷烈ナル時ニメ、全國ノ病勢一齊ニ增進シ、日々新患者千以上ヲ出タシ、其十一日間ハ二千以上ニ上リ、十九日○明治十九年(紀元二五四六年)八月。ヨリ廿五日○明治十九年(紀元二五四六年)八月。ニ至ル一週間ノ患者ハ壹萬五千ニメ、一ケ月五萬七十餘人ノ患者ヲ出タシ、三萬七千餘人ノ死亡アリ。而メ東京ハ、三日○明治十九年(紀元二五四六年)八月。ヨリメ十五區內ノ患者百名以上トナリ、十八日○明治十九年(紀元二五四六年)八月。ヨリハ二百以上ニ上リ、三十一日○明治十九年(紀元二五四六年)八月。ニハ終ニ三百以上ニ達シ、翌九月一日二日○明治十九年(紀元二五四六年)。ノ三日間ニ涉レリ。此三日間ヲ以テ患者最多ノ極點トス。東京ニ於テ一日三百以上ノ患者ヲ出タセシハ實ニ未曾有ノ事ニメ、五所ノ避病院ハ既ニ悉ク充滿スルモ、患者ヲ送クルノ輿ハ相連絡シテ、殆ント人ノ往來ヲ妨ケ、各所ノ火葬場ハ、日夜火ヲ絕タサルモ、舊棺未タ盡キス、新棺早ク山ヲ爲シ、其慘狀實ニ言フニ堪エズ。○略。中

九月○明治十九年(紀元二五四六年)。ニ入ルモ、全國ノ病勢ハ依然トメ猖獗ヲ逞クシ、日々ノ新患者尙ホ千以上ニ在リテ、月末二日間始メテ千位ヲ下リ、一ケ月ノ總患者四万四千ニ超ユ。○略。中東京ハ依然トメ其兇暴ヲ逞クセシガ、中旬○明治十九年(紀元二五四六年)九月。ニ至リ始メテ百名以下トナリ、漸次患者ヲ減少ス。○略。中

十月○明治十九年(紀元二五四六年)。ニ入リ、時季ノ稍秋冷ニ傾キタルニモ拘ラズ、東北寒地ノ青森ハ病勢依然其猖獗ヲ逞クシテ、新患者日々百名以上ナリシガ、漸次減少シテ、中旬○明治十九年(紀元二五四六年)十月。ハ大ニ衰ヘ、下旬○明治十九年(紀元二五四六年)十月。ニ至リ終ニ熄ム。其他ノ地方ハ多クハ減衰シ、東京ハ、中旬○明治十九年(紀元二五四六年)十月。以降、新患者十名以下トナル。○略。下

郡區町村戶數ニ對スル虎列刺有病地及人口ニ對スル患者一覽表(明治十九年)

廳府縣	發熄月日	郡區數		町村數		戶數		人口	患者	死亡
		全數	有病	全數	有病	全數	有病			
東京	發六月七日 熄十二月廿四日	三	三	一七三	一三三	三五一六	九九一九	二七七五〇六	一三一七	九八七九

○各府縣略。

明治十九年　虎列刺病流行紀事

此疫東京區部ニ於ケル患者及死者ハ、東京府統計書言フ所左ノ如シ。流行紀事ノ統計ニ比スレバ、多少ノ出入有リ。未ダ孰カ是ナルヲ知ラス。

麹町區	二七三。	神田區	一六二一。	日本橋區	二三六三。
京橋區	一五九四。	芝區	八三六。	麻布區	一五一。
赤坂區	六七。	四谷區	一一五。	牛込區	一六三。
小石川區	一九七。	本郷區	四五六。	下谷區	四九三。
淺草區	九五三。	本所區	七二三。	深川區	八〇八。
區部計	一〇八一三。	郡部計	一三六三。	合計	一二一七六。

東京府統計書

ニシテ、之カ死亡ハ、總計千四十二人也。

之ニ對スル東京府警視廳ノ施設、左ノ如シ。

東京府ハ、五月十日（明治十九年（紀元二五四六年））私有地内下水・塵溜・總雪隱・井側、並ニ其周圍等ノ掃除修理ヲ令シ、其執行手續ヲ定メ、巡査ヲメ郡區吏ト共ニ臨檢監督セシム。又同日（明治十九年（紀元二五四六年）五月十日）以前ヨリ、溝・塹・池沼等、其官ニ係ルモノハ、浚渫修理ヲ必要ト認ムル毎ニ、各其負擔官衙ニ照會ス。十五日（明治十九年（紀元二五四六年）五月）ヨリ、京都大坂兩府ヨリ來ル船舶旅客等ニ對シ、水上警察署ニテ豫防上視察ヲ加ヘシメ、又投宿ノ旅人等ニハ、一層健康上ニ注目セリ。十九日（明治十九年（紀元二五四六年）五月）京都大坂ノ二府、及ヒ兵庫縣下ヲ、虎列刺病流行地ト認定セラレタルニ由リ、同地方ヨリ來ル船舶ニ對シテ、船舶檢査規則ヲ實施ス。廿二日（明治十九年（紀元二五四六年）五月）警察署ニ令シ、魚腸樽等不潔ノ物品ハ、速ニ之ヲ人家遠隔ノ地ニ運搬セシメ、畜場・牛馬小屋・魚市場・青物市場等ハ、清潔ニ掃除ヲ爲サシメ、下水其他ノ汚水ハ、之ヲ街路等ニ撒布セス、又未熟ノ果物ハ、之ヲ販賣セサル樣嚴重視察ヲ加ヘ、昨年（明治十八年（紀元二五四五年））虎列刺ノ發生セシ場所、及ヒ貧民群居ノ場所ハ、一層其清潔ニ注意シ、神佛祭禮等多人數群集ノ場所ニハ、販賣セル飲食物・厠場ノ清潔等ニ注意ヲ加ヘシメタリ。廿九日（明治十九年（紀元二五四六年）五月）暴瀉及ヒ吐瀉患者ノ屆出ヲ達ス。三十日（明治十九年（紀元二五四六年）五月）舗店ニ露陳シ、又ハ行商スルモノニメ、直ニ食用ニ供スヘキ販賣飲食物ニ、覆蓋ヲ設ケシム。六月四日（明治十九年（紀元二五四六年））虎列刺患者ノ處置及ヒ消毒法ヲ一定センカ爲メ、該患者處置ノ手續及ヒ消毒法ノ程度ヲ定メ、主務員ヲシテ各警察署員ニ施行方ヲ傳習セシム。七日（明治十九年（紀元二五四六年）六月）警視廳内ニ檢疫事務所ヲ置キ、專ラ豫防消

毒ノ事ニ從事セシム。又同日（明治十九年（紀元二五四六年）六月七日。）ヨリ患家及ヒ其比隣ノ者ト雖、病者ニ親接シ、或ハ病者ト同一ノ便所ヲ使用セルモノハ、五日乃至一週間隔離若クハ交通ヲ遮斷ス。同（明治十九年（紀元二五四六年）六月。）廿六日吐瀉病ニ罹リ醫藥ニ就ク能ハサル貧困者ノ爲メ、施療劵ヲ發ス。七月二日（明治十九年（紀元二五四六年）。）横濱港（武藏國。）ニ發病者アルヲ以テ、汽車停車場ニテ陸上檢疫ヲ施行ス。三日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）消毒所ヲ鈴ケ森品川沖第二砲臺ニ設ケ、尋テ新橋停車場構内ニモ之ヲ設ク。六日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）火葬ハ日沒後ニ之ヲ行フノ成規ナルモ、流行熾盛ノ傾キアルヲ以テ、晝夜之ヲ施行セシメタリ。九日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）隔離法遮斷法ノ區域ヲ定ム。十一日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）病症ノ如何ニ拘ハラス、死亡アル片ハ、郡區役所ニ於テ實況ヲ査察ス。十二日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）本所避病院ヲ開ク。十六日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）病勢益〻猛劇ノ勢アルニ依リ、曩キニ設置シタル檢疫事務所ヲ廢シ、更ニ檢疫本部ヲ置キテ、一層其事務ヲ擴張シ、警視總監ヲ委員長トシ、警視以下、幷ニ東京府書記官ニ檢疫委員ヲ命ス。廿一日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）横濱港（武藏國。）虎列刺流行地ト認定セラレタルニ依リ、品川沖第二臺場、上總澪、及ヒ金杉沖ノ三ケ所ニ檢疫所ヲ置キ、流行地ヨリ來ル船舶ヲ檢査ス。廿二日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）虎列刺死體及ヒ排泄物運搬人夫ヲ其運搬先ニ於テ消毒セシムルカ爲メ、火葬場及ヒ排泄物燒却場並ニ浴場蒸薰室ヲ設ク。廿六日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）日本橋區坂本町（市。）内。ニ臨時避病院ヲ設ク。三十日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）三上水路取締ノ爲メ、巡査三十名ヲ增員ス。八月四日（明治十九年（紀元二五四六年）八月。）當府下（東京府。）ヲ流行地ト認定セラル。依テ古着襤褸ノ輸出ヲ禁ス。此日（明治十九年（紀元二五四六年）八月七日。）駒込避病院ヲ開ク。又各檢疫所ヲ廢シ、要所ニ檢査所ヲ置キ、患者死者ノ出入ニ注意セシム。九日（明治十九年（紀元二五四六年）八月。）行旅船舶ノ檢査ヲ止ム。十日（明治十九年（紀元二五四六年）八月。）火葬場ノ不足ヲ告クルヲ以テ、更ニ本日（明治十九年（紀元二五四六年）八月十日。）ヨリ千住落合砂村（武藏國。）ノ三火葬場ニ野天燒場ヲ設ケ、夜間ニ限リ、其使用ヲ許シ、後桐ケ谷火葬場（武藏國。）ニモ亦之ヲ許シタリ。十一日（明治十九年（紀元二五四六年）八月。）以降、祭禮ニ山車、踊屋臺ヲ舁出スルヲ禁シ、劇場道化踊等ハ、說諭シテ其興行ヲ停止ス。十二日（明治十九年（紀元二五四六年）七月。）日々夥多ノ排泄物等ヲ出タシ、火葬場ノミニテハ燒盡シ難キヲ以テ、南葛飾郡永田新田（武藏國。）ニ排泄物燒却場ノ設置ヲ許ス。十七日（明治十九年（紀元二五四六年）八月。）大久保避病

院ヲ開ク、九月九日○明治十九年(紀元二五四六年)。避病院入院患者附添人ハ、老幼ノ外一人ニ限リ之ヲ許シ、食料一日金十錢ヲ給與ス。九月廿九日○明治十九年(紀元二五四六年)。豫テ府會ノ決議ヲ經タル檢疫醫雇入ノ期限、本日○明治十九年(紀元二五四六年)九月廿九日。ヲ以テ滿チ、一旦總員ヲ解キタリシカ、仍ホ日々五六十名ノ患者アルヲ以テ、十月一日○明治十九年(紀元二五四六年)。同會ノ可決ヲ經テ、更ニ臨時檢疫醫十二名ヲ雇入ル。其後病勢漸次縮退セルヲ以テ、二十一日○明治十九年(紀元二五四六年)十月。祭禮ニ山車、踊屋臺ヲ舁出スルノ禁ヲ解キ、劇場道化踊ノ興行ヲ解停ス。廿八日○明治十九年(紀元二五四六年)十月。當府下○東京府。流行地ノ認定ヲ解カレタルヲ以テ、翌廿九日○明治十九年(紀元二五四六年)十月。他府縣ヘ古着襤褸輸出ノ禁ヲ解キ、三十一日○明治十九年(紀元二五四六年)十月。檢疫醫ヲ解雇シ、十一月廿五日○明治十九年(紀元二五四六年)。檢疫本部ヲ閉ヂ、各檢疫所ヲ閉鎖ス。

明治十九年腸窒扶斯事蹟

明治十九年腸窒扶斯　亦東京區部ニ於テ千人以上ノ患者ヲ出ス。

——明治十九年虎列刺病流行紀事

麹町區　五八。　神田區　一〇九。　日本橋區　一二四。
京橋區　二一二。　芝區　一五七。　麻布區　七九。
赤坂區　二四。　四谷區　五三。　牛込區　四二。
小石川區　七九。　本郷區　五九。　下谷區　三九。
淺草區　五一。　本所區　九〇。　深川區　五四。
區部計　一二三一。　郡部計　一九四。　合計　一四二五。

——東京府統計書○摘要。

附記明治十九年天然痘其他

明治廿年傳染病

明治廿一年傳染病

死亡者ハ、東京府統計書ニ據レハ、總計六百廿八人也。

〔附記〕明治十九年○紀元二五四六年。ニ於ケル東京ノ傳染病ハ東京府統計書ニ據ルニ、虎列刺腸窒扶斯ノ外、天然痘流行ス。區部患者四百八十七人有リ。郡部患者ヲ合スレハ五百五十人。內芝區○市內。ノ百卅一人ヲ最多トシ、淺草區○市內。ノ卅七十一人、京橋區○市內。ノ四十四人、神田區○市內。ノ四十二人、日本橋區○市內。ノ卅六人等、順次相亞グ。其死者ハ總計二百十五人也。他ハ、實布埜里亞二百九十五人、內區部二百六十六人ニシテ、死者總計百六十五人、赤痢八十五人、內區部七十三人ニシテ、死者總計四十七人、發疹窒扶斯十二人○區部。ニシテ、死者六人也。

廿年○明治○紀元二五四七年。度ノ傳染病ハ、東京府統計書ニ、

腸窒扶斯患者六五九(區部六〇一)死者二七七。
痘瘡患者一一五(區部一〇五)死者三〇。
赤痢患者三七(區部三三)死者一四。
實扶埜里亞患者三四六(區部二九二)死者二一五。
虎列刺患者八一(區部六九)死者四三。
發疹窒扶斯患者一〇(區部六)死者二。

廿一年○明治○紀元二五四八年。度ノ傳染病ハ、亦東京府統計書ニ、

腸窒扶斯患者六五一（區部五四四）死者二五六。
虎列刺患者　六二（區部　五一）死者　三七。
痘　瘡　一二（區部　一二）死者　一。
實布垤里亞患者三六一（區部三一四）死者二二七。
赤　痢　患　者　四四（區部　四四）死者　一三。
發疹窒扶斯患者　八（區部　六）死者　四。

明治廿二年腸窒扶斯

廿二年○明治二五四九年。紀元東京腸窒扶斯流行シ、區部千百六十九人、郡部ヲ合セテ千二百五十五人ノ患者有リ。死スル者四百十一人。○東京府統計書。

明治廿二年腸窒扶斯事蹟

明治廿二年腸窒扶斯　東京府統計書ニ據ルニ、明治廿二年○紀元二五四九年。ノ東京ニ於ケル腸窒扶斯流行ハ、患者

麹町區	九五。	神田區	一三七。
京橋區	二七二。	芝區	一二一。
赤坂區	二七。	四谷區	三三。
小石川區	四九。	本郷區	六二。
淺草區	五二。	本所區	三七。
區部計	一一六九。	郡部計	八六。
日本橋區	一〇六。		
麻布區	三七。		
牛込區	四五。		
下谷區	四八。		
深川區	四八。		
總計	一二五五。		

ニシテ、死者四百十一人也。

附記

〔附記〕明治廿二年○紀元二五四九年。度ノ東京ニ於ケル腸窒扶斯外ノ傳染病ハ左ノ如シ。亦東京府統計書ニ據ル。

實布垤里亞患者四二五（市部三四六）死者二六〇。
虎列刺患者　三六（市部　三〇）死者　一七。
發疹窒扶斯　三（市部）。
赤痢患者二二（市部二一）死者一〇。
痘瘡患者四二（市部三八）死者　五。

明治廿二年實布垤里亞其他

明治廿三年虎列刺

廿三年○明治二五五〇年。紀元東京虎列刺病又流行ス。即チ七月廿三日○明治廿三年。紀元二五五〇年。京橋區○市內。ニ發スル者ヲ初發トシ、八月下旬○明治廿三年。紀元二五五〇年。以降九月下旬○明治廿三年。紀元二五五〇年。ニ至ル間病勢猖獗ヲ極メ、十二月十三日○明治廿三年。紀元二五五〇年。ニ至リテ全ク熄ム。是ニ於テ、東京府ニ在リテハ、七月中旬○明治廿三年。紀元二五五〇年。市內ノ清潔法ヲ施行シ、大日本私立衛生會ハ、罹病貧者ノ爲弘ク施療劵ヲ發シ、皇室ヨリハ下賜金有リタリ。患者總數四千零廿七人也。○明治廿三年虎列刺病流行紀事。東京府統計書。是年○明治廿三年。紀元二五五〇年。腸窒扶斯亦行ハル。○東京府衛生年報。

明治廿三年腸窒扶斯

明治廿三年虎列刺事蹟

明治廿三年虎列刺　八、明治廿三年。虎列刺病流行紀事ニ、

東京府ハ七月廿三日○明治廿三年。紀元二五五〇年。京橋區本挽町一丁目○市內。ニ一人○患者。

帝都時代ノ疫癘

アリ、次デ八月六日（明治廿三年（紀元二五五〇年））同區（市内京橋區）南紺屋町ニ發シ、忽ニシテ三十一人ノ患者ヲ同町（市内京橋區南紺屋町）ニ發シ、終ニ其毒ヲ同區（市内京橋區）弓町、越前堀、芝區南佐久間町（市内）日本橋區龜島町（市内）赤坂區田町（市内）本所區小梅村（市内）及ヒ南葛飾郡與戸村（武藏國）ニ散シ、以テ東京府内流行ノ端ヲ開ケルモノヽ如シ。夫ヨリ凡ソ二週間、即チ八月廿一二日（明治廿三年（紀元二五五〇年））ノ頃マデハ、日々十數人ノ患者アリト雖モ、敢テ恐ルベキ景況ヲ見ザリシガ、其廿三日（明治廿三年（紀元二五五〇年））八月。頃ヨリ病勢頓ニ增進シ、爾來一日ニ惡兆ヲ呈シ、九月廿四日（明治廿三年（紀元二五五〇年））ノ新患者ハ實ニ百四十八人ヲ數ヘ、其前後一週間ヲ以テ最モ流行ノ盛ナル時トス。十月（明治廿三年（紀元二五五〇年））次衰頽十一月（明治廿三年（紀元二五五〇年））ニ至リ、始メテ日々ノ新患者ヲ減ジ、漸ク各郡區中最モ盛ナルハ深川區（市内）ニシテ、之ニ次クハ神田區（市内）及ビ京橋、日本橋區（市内）トス。就中一局部ニ於テ最モ患者ノ多キハ、本所（市内）養育院ニ三十八人、京橋區新榮町（市内）童貞女學校ニ二十三人、其他神田區和泉町一番地（市内）下谷竹町十二番地（市内）日本橋區蠣殼町二丁目一番地（市内）神田美土代町二丁目一番地（市内）本所綠町五丁目三十七番地（市内）千住五丁目七番地、（武藏國南足立郡）市ヶ谷長延寺谷町七番地（市内）ノ如キ、一個ノ番地ニシテ十一人乃至十五人ノ患者ヲ出セリ。而シテ其傳染ハ水道ニ媒介セラレ、其流行ノ增進ハ、霖雨水道ノ汚濁セル時ニ伴フヿ多キカ如キ觀ヲ呈セリト云フ。

（參考）虎列刺病流行事蹟報告書ニ據レバ、

明治二十三年（紀元二五五〇年）ノ流行（千八百九十年）

明治二十三年（千八百九十年）ノ流行ハ六月（明治廿三年紀元二五五〇年）長崎（肥前國）ニ發生セシニ始マリ、遂ニ四萬餘ノ患者ヲ出スニ至レリ。此流行ニ於ケル病毒モ、亦タ海外ヨリ傳來シタルノ證跡アリ、已ニ二年前ヨリ本邦ニ近キヒリピン群島ニ虎列刺流行シ、其數頗ル多カリキ。即チ千八百八十八年（明治廿一年紀元二五四八年）八月十五日ヨリ、九年（明治廿二年紀元二五四九年）四月末ニ至ル死者數ハ、マニラニ於テ一萬六千四百八十人アリキ。又千八百八十九年（明治廿二年紀元二五四九年）ノ後半期ニハ、スマトラ島ミソボタミヤ、波斯等ニ流行シ、本年（千八百九十年）五月十日ノ報ニハ、再ヒ爪哇ノテチゲシスカルタ等ニ流行ノ兆アリシカ、其後幸ニシテ流行性ヲ失セリト雖モ、該島各所ニ患者絶ヘス、又同年（明治廿三年紀元二五五〇年）四月五日ヲ以テ、葡萄牙政府ハマニラ港ニ虎列刺消滅スト雖モ、他ノヒリピン島各港ハ尙ホ虎列刺流行地ト認ムルノ告示ヲ發セリ。

又此病ハ、本年（明治廿三年紀元二五五〇年）遠ク歐洲ヲ犯シ、本邦ニ此流行ヲ來サヽルノ時ニ於テ、已ニ西班牙ニ進入セリ。即チ六月十七日（明治廿三年紀元二

五五〇年)ニ至ル迄、同國ピエブラ、ド、ルカ(Puebla de Rugat)ニ於テモ之レニ罹ルモノ百五十人ニシテ、内五十三人ノ死者アリキ。又此年(〇明治廿三年紀元二五五〇年)四月末ニ於テハ、亞細亞土耳其ニモ之ヲ發シタル地アリ。

右ノ如ク虎列刺ハ、數年前ヨリ我國ニ遠カラサルヒリピン群島ニ流行シ、加フルニ本年(〇明治廿三年紀元二五五〇年)ハ此病大ニ勢力ヲ逞ウシ、西ハ遠ク歐洲ニ進入シ、東ハ瓜哇ヒリピン群島ニ波及セリ。而シテ本邦ニ於テハ、六月(〇明治廿三年紀元二五五〇年)末、長崎(〇肥前國)ニ數人ノ患者ヲ發シ、七月五日(〇明治廿三年紀元二五五〇年)ヲ以テ此報告者ノ一人中濱東一郎ハ、親シク該地ニ至リ、下泄物ヨリ虎列刺菌ノ純養ヲ施シテ、明カニ眞性虎列刺ナル「ヲ確定シタリ。由レ是觀レ之、此年(〇明治廿三年紀元二五五〇年)モ、亦虎列刺大蔓延ノ餘波ヲ蒙リテ、此流行ヲ來タセシモノナラン。且支那地方ニ於テハ、傳染病流行スルモ、外國人居留地ニ侵入スルニアラサレハ之ヲ知ルヲ得サレハ、彼支那人中ノ患者ハ縱令幾千名ニ上ルモ之ヲ知ルニ由シナシ。上海(〇清國)及香港(〇清國)ヨリノ報知ニ由レハ、每歲同地ニ虎列刺病發生スルハ、殆ント常例ナリト云フ。故ニ此年(〇明治廿三年紀元二五五〇年)ノ流行モ亦間接ニ支那ヨリ傳來シタルヤモ知ルヘカラサルナリ。

此年(〇明治廿三年紀元二五五〇年)七月四日、(長崎ニ虎列刺ヲ發シタル後一週日)汽船類朝丸ハ上海(〇清國)ヨリ長崎縣口ノ津ニ入津セシカ、數日ニシテ專ラ該船ニ關係セルモノニ虎列刺ヲ發シ、此發病者ハ全ク長崎ノ流行地ト交通シタル「ナキヲ知レリ。夫レ長崎港(〇肥前國)ノ如キ船舶ノ出入多ク交通頻繁ナル地ニ於テハ、病毒傳來ノ系統ヲ知ルニ頗ル困難ナリト雖モ、口ノ津(〇肥前國)ノ如キハ、一

過僅カ一二艘ノ船舶ノ外國ト交通スルニ過キサレハ、之レヲ知ルニ甚タ困難ナラス。而シテ縱令類朝丸乘込人ニハ此病ヲ發シタルモノナキモ、之レニ關係アル者ニ多ク之ヲ發シタルヲ見レハ、之レ偶然ノ發顯トノミ云フヲ得サルナリ。余輩ハ之レヲ以テ病毒ノ外國ヨリ輸入スルノ一斷案トセサルヲ得サルナリ。

患者及死者數ハ、明治二十三年虎列刺病流行紀事ニ、

府縣及北海道	發熄月日	人口	戶數	患家ノ數	患者	死亡
東京	自五月十六日至十二月十三日	一、三四、四五三	二八五、五三二	三、一九三	四、〇二七	三、三〇七

ト見ユ。東京府統計書ハ內市部ノ患者總計ヲ三千四百六十五人、死者總計ヲ二千八百四十五人トシ、各區ノ統計ヲ擧クルコト、左ノ如シ。

虎列刺〇明治廿三年(紀元二五五〇年)。

區	患者	死者	區	患者	死者
麴町	六三	五〇	神田	四五八	三五八
日本橋	四〇四	三三五	京橋	四八五	三九四
芝	三一〇	二七一	麻布	四六	三八

赤坂	二八	二一四	谷	八二	六九		
牛込	一〇八	八三	小石川	四七	三九		
本郷	一二一	九八	下谷	二〇四	一五六		
淺草	四四四	三六二	本所	二八三	二三一		
深川	三八二	三四〇	計	三四六五	二八四五		

此外兵營患者七人死者四人、監獄患者廿五人死者廿四人、海上患者十八人死者十四人有リ。又郡部ハ患者合計五百二人死者合計四百廿人也。

東京府統計書（摘要。）

若夫レ之カ豫防消毒等ニ關シテハ、明治二十三年（紀元二五五〇年。）虎列刺病流行紀事、左ノ如ク記ス。

東京府ニ於テハ、七月中旬（明治廿三年（紀元二五五〇年。））市參事會ニ於テ、市内各區ニ大清潔法ヲ施行センガ爲メ、其經費ヲ臨時市會ニ求メ、消毒的大掃除ヲ爲セリ。其後病毒ノ侵入スル所トナリ、本所病院ノ病室不足ヲ告クルニ由リ、駒込病院ヲ開院セリ。（下略。）

又大日本私立衞生會ハ、其流行ニ先チ貧者ヲシテ容易ニ醫療ニ就カシムルノ便ヲ開キ、以テ豫防ノ効ヲ全フセンガ爲メ、有志ノ義金ヲ集メ、貧困者虎列刺病ノ施療劵ヲ發行セリ。事畏クモ　叡聞ニ達シ　聖上（明治天皇。）ヨリ金壹千圓、皇后陛下（昭憲皇太后。）ヨリ金五百圓ヲ下賜セラレ、其他有志者ノ義金ヲ合セ、其金額二千六餘百圓ニ達セリ。而シテ之ニ對シ、施療劵ヲ發行スルヿ殆ント一萬四千枚ニ及ビ、府廳ニ托シ、各郡區役所ヲ經テ、遍ク貧民ニ配布セリ。

各郡區ニアル私立衞生會ハ、其郡區内公衆ノ自衞心ヲ誘起センガ爲メ、衞生講話會ヲ各所ニ開キテ、豫防上ノ注意ヲ演說シ、又其心得書ヲ印刷シテ遍ク各戸ニ配布シ、或ハ豫防委員ヲ設ケテ區内ヲ巡視セシメ、或ハ擔當醫ヲ定メテ貧困患者ヲ診察セシメ、或ハ飲料水ノ試驗ヲ行フ等大ニ豫防法ヲ幇助セリ。

（參考）是歲（明治廿三年（紀元二五五〇年。））ニ於ケル虎列刺病ノ系統ニ關シ、日本傳染病小史記ス所、左ノ如シ。

千八百九十年（明治廿三年（紀元二五五〇年。））には、六月下旬病毒長崎港（肥前國。）に輸入せれ、忽ちにして同市（長崎。）に蔓延し、遂に九州其他に傳播せり。就中其流行の猛劇なりしハ東京大阪（攝津國。）にして、九州の諸縣之れに次ぎ、八九月（明治廿三年（紀元二五五〇年。））に於ける患者數一萬千八十一人、九月（明治廿三年（紀元二五五〇年。））に於ける患者數二萬千四百

明治廿三年腸窒扶斯蹟

六十六人なり、而して十月（元二五五〇年）に至りては、半數以下に減じ、十一月（元二五五〇年）には病勢愈々衰て、十二月（元二五五〇年）には唯た點々各地に散發せるのみ。而して初發よりの患者總數ハ四萬六千十九人、死亡三萬五千二百二十七人、患者百人に付死亡七五・五五にして、一般に死亡率大なり。

明治廿三年腸窒扶斯　明治卅六年東京府衞生年報ニ據レバ、明治廿三年（元二五五〇年）東京ノ腸窒扶斯患者ハ千七百八十五人有リ。東京府統計書ニハ、患者總計千七百八十八人死者總計五百七十四人及監獄患者七人死者三人トシ、內市部ノ患者及死者ヲ數フル、次ノ如シ。

腸窒扶斯（明治廿三年（紀元二五五〇年））

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	一二七	二九	神田	二三六	七八
日本橋	一五五	四八	京橋	三一〇	九三
芝	一七一	六〇	麻布	四四	一二
赤坂	四六	七	谷	四七	一三
牛込	七五	三〇	小石川	六六	三一
本郷	一一一	二六	下谷	八二	二八
淺草	七〇	三〇	本所	五〇	一五
深川	四八	一五	市	一六三八	五一五

外ニ監獄ニ患者七人死者三人有リ。

而シテ其最多ク患者ヲ出シタルハ、四月（元二五五〇年）ノ二百廿二人（郡市合算下同。）ニシテ、三月（元二五五〇年）ノ二百十六人之ニ次キ、七月（元二五五〇年）ノ百九十五人、八月（元二五五〇年）ノ百九十四人、五月（元二五五〇年）ノ百七十人、九月（元二五五〇年）ノ百六十六人亦之ニ次ク。

附記　明治廿三年實布埕里亞其他

〔附記〕　明治廿三年（紀元二五五〇年）ニ於ケル東京ノ實布埕里亞其他ハ、東京府統計書ニ次ノ如ク見ユ。

實布埕里亞患者　三三〇（市二七三）　死者二一三（市一六九）。　赤痢患者　五九（市五〇）　死者二一（市一七）。
痘瘡患者　七八（市七五）　死者一一（市）　發疹窒扶斯患者　五（市）　死者三（市）

是年（元二五五〇年）流行性感冒亦大ニ東京ニ行ハル。疫邪流行年譜云フ、

同（明治）廿三年之疫病

五六月ノ向、風邪大ニ流行、洋名エンフルエンザト云。四月初旬ヨリ行ハ

レ、五六月盛、七月中旬ニテ止ム。

七月初旬頓歇流行。○略。中

十二月中旬ヨリ風邪流行ス。其證候五六月ノ感冒ト同シ。

明治廿四年腸窒扶斯

廿四年○明治二五五一年。東京市腸窒扶斯流行シ、四月五月六月○明治廿四年

明治廿四年腸窒扶斯蹟

(紀元二五五一年)。及九月○明治廿四年(紀元二五五一年)。ニ於テ、患者ヲ出スコト最モ多ク、其總數千百九十八人、死者總數三百廿二人ニ至ル。○東京府統計書。

明治廿四年腸窒扶斯 東京府統計書ニ據ルニ、明治廿四年○紀元二五五一年。ノ東京市內ニ於ケル腸窒扶斯流行ハ、全年ニ亘リ、就中六月○明治廿四年(紀元二五五一年)。ノ如キ郡部ヲ合スレバ、患者二百廿六人ヲ出シ、五月○明治廿四年(紀元二五五一年)。ハ二百十五人、十月○明治廿四年(紀元二五五一年)。ハ百六十六人、四月○明治廿四年(紀元二五五一年)。ハ百卅六人ヲ出ス。府內ノ患者總計一千三百六十三人、死者總計三百六十九人、內市部ハ左ノ如シ。

腸窒扶斯○明治廿四年(紀元二五五一年)

區	患者	死者	區	患者	死者
麴町	六六	一八	神田	一七二	四六
日本橋	一二九	三八	京橋	一〇四	二五
芝	一三六	四三	麻布	二六	四
赤坂	一八	四	四谷	三五	八
牛込	四三	一六	小石川	四二	一二
本郷	八九	一八	下谷	一二〇	二八
淺草	九八	三〇	本所	七七	一六
深川	四三	一六	市	一一九八	三二二

此外監獄患者六十四人死者六人。

附記明治廿四年痘瘡其他

〔附記〕 明治廿四年○紀元二五五一年。ノ東京市ハ、腸窒扶斯ノ外、痘瘡・虎列刺其他ノ傳染病亦行ハル。東京府統計書ニ據レバ、

痘瘡患者 九八六、 死者 二五三。 虎列刺患者 二七七、 死者 一九九。

實布埃里亞患者 二九〇、 死者 一五三。 赤痢患者 七九、 死者 二二。

發疹窒扶斯 一〇、 死者 五。

中ニ就テ天然痘ハ、稍注意ス可キ流行ニシテ、東京府郡部ヲ合スレハ實ニ患者千六十八人、死者二百七十二人ニ達シ、外ニ監獄患者六人、死者二人有リ。

明治廿五年痘瘡

廿五年○明治二五五二年。東京市痘瘡流行シ、患者五千八百八十三人、

明治廿五年腸窒扶斯

明治廿五年痘瘡事蹟

死者千五百三十人ヲ出ス。蓋前年（明治廿四年（紀元二五五一年））ノ流行ヲ承ケ、遂ニ猖獗ヲ極ムルニ至レル也。是年（明治廿五年（紀元二五五二年））腸窒扶斯亦行ハル。（東京府統計書。東京府衛生年報。）

明治廿五年痘瘡　ハ、東京府統計書、東京府衛生年報等ニ據レバ、明治廿五年（紀元二五五二年）。ノ東京市ニ於ケル痘瘡流行ハ、患者五千八百八十三人死者千五百卅人ヲ出ス。即チ各區ノ統計

痘瘡（明治廿五年（紀元二五五二年））。

區	患者	死者	區	患者	死者
麴町	二四五	六六	神田	一〇八一	三〇八
日本橋	七二八	一二三	京橋	七三〇	二三八
芝	三八五	七七	麻布	八一	二三
赤坂	五三	一九	四谷	一六六	五四
牛込	一一五	二七	小石川	一三三	四二
本郷	二九三	七一	下谷	三七七	九五
淺草	四八七	一二五	本所	五七八	一六三
深川	三五五	一〇九	市	五八八三	一五三〇

外ニ監獄患者五十九人、死者五人有リ。

ニシテ、之ニ東京府郡部ヲ合スレバ患者總數六千三百七十五人ニ達シ、死者千六百四十六人ニ達ス。其劇甚想フ可キ也。此ノ疫ハ實ニ東京ヲ中心トス。

此ノ流行ハ、全年ニ亘ルト雖、其主トシテ流行シタルハ、二月三月一月四月五月六月（明治廿五年（紀元二五五二年））也。

（參考）日本傳染病小史云フ、

明治初年に至り、種痘法稍々行はれしと雖も、時に流行を起せり。而して最近廿五年間に於て、四回の流行あり。第一回は千八百八十五年（明治十八年（紀元二五四五年））。より同八十七年（明治廿年（紀元二五四七年））。に至る三ヶ年にして、八十六年（明治十九年（紀元二五四六年））。の如きは、七萬二千八百二十一人の患者と、一萬八千五百六十一人の死亡者を出せり。即人口一萬に對して約十九人、總死亡千に對し約二十人の痘瘡死亡を出したるものにして、近時に於ける最も激烈なる流行なりとす。第二回の流行は、千八百九十二年（明治廿五年（紀元二五五二年））。乃至九十四年（明治廿七年（紀元二五五四年））。の三ヶ年に亘り、九十三年（明治廿六年（紀元二五五三年））。には四萬一千八百九十八人の患者と、一萬一千八百五十二の死亡者を出せり。第三回は、

明治廿五年腸窒扶斯事蹟

千八百九十六年（明治廿九年（紀元二五五六年））及九十七年（明治廿年（紀元二五五七年））の二ヶ年にして、九十七年（明治廿年（紀元二五五七年））には四萬一千九百四十六の患者と、一萬二千二百七十六の死亡者を出せり。最近の第四回の流行は、千九百七年（明治四十年（紀元二五六七年））より千九百八年（明治四十一年（紀元二五六八年））に亘り二萬に垂んとする患者を出せり。

痘瘡の流行は、種痘の普及と否とに關すべきは勿論にして、之れを日本に於ける流行に徴するも、痘瘡流行し來たれる地方に於ては、盛んに種痘を勵行するを以て、其後數年間は、敢て流行を見ざるも、今や他の種痘普及せざる地方に向て猛威を逞ふす。例へば、最近流行の第一回に於ては、我が九州及中國地方專ら侵襲せられ、第二回は、病毒東漸し、東京を中心として北部に及び、第三回は、全國に患者を發生するに至れり。第四回は、九州より流行し始め、神戸、大阪（攝津國）、東京等の市街地を侵せり。

明治廿五年腸窒扶斯　ハ、五月六月十月四月（明治廿五年（紀元二五五二年））ヲ重ナル者トシ、全年ニ亘リテ流行シタル者ニ係ル。市内ノ患者二千二百九十四人、死者六百八十三人、郡部ヲ合シテ患者二千五百九十二人、死者七百九十二人也。

腸窒扶斯（明治廿五年（紀元二五五二年））

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	九〇	二五	神田	二九五	七一
日本橋	二五一	七七	京橋	一九四	六九
芝	二九四	八四	麻布	五三	一五
赤坂	二七	七	谷	五三	二二
牛込	六〇	一六	小石川	八七	一九
本郷	一六七	四六	下谷	一〇四	三九
淺草	二九八	八五	本所	二一六	七〇
深川	一〇五	三八	市	二二九四	六八三

外ニ監獄患者廿五人、死者一人。

附記　明治廿五年實布垤里亞其他

〔附記〕明治廿五年（紀元二五五二年）度ニ於ケル東京市ノ實布垤里亞・赤痢其他ハ、東京府統計書ニ左ノ如ク見ユ。

實布垤里亞患者　三六四、死者　三〇九。
虎列刺患者　六三、死者　三〇。
赤痢患者　一〇四、死者　三七。
發疹窒扶斯患者　一八、死者　二。

明治廿六年腸窒扶斯

廿六年（明治〇紀元二五五三年）東京市腸窒扶斯流行シ、患者一千八百九十六

明治廿六年腸窒扶斯事蹟

人、死者六百八十五人有リ。○東京府統計書。

明治廿六年腸窒扶斯　東京府統計書記ス所ヲ見ルニ、明治廿六年○紀元二五五三年。ニ於ケル東京市内ノ腸窒扶斯ハ、

腸窒扶斯○明治廿六年(紀元二五五三年)

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	八七	二五	神田	三五七	一二四
日本橋	三〇七	一一八	京橋	一七七	六三
芝	一三八	三九	麻布	三七	八
赤坂	三六	一三	四谷	四三	九
牛込	七八	二五	小石川	九三	二九
本郷	一〇五	三五	下谷	一三七	五九
淺草	一一九	五五	本所	一〇六	四四
深川	七六	三九	市	一八九六	六八五

外ニ監獄患者九人有リ。

ニシテ、之ニ東京府郡部ヲ合スレバ、患者總數二千三百七十八人、死者總數八百三十人ヲ出シ、全年ニ亘リテ流行シ、就中九月八月十月七月○明治廿六年(紀元二五五三年)。最モ多クノ患者ヲ出シタリ。

附記

明治廿六年寶布埜里亞其他

〔附記〕明治廿六年○紀元二五五三年。ニ於ケル東京市内ノ寶布埜里亞、痘瘡其他ノ流行、左ノ如シ。○東京府統計書。

寶布埜里亞患者　五四九、死者　四三三。
痘瘡患者　一六七、死者　五四。
赤痢患者　九七、死者　二四。　虎列刺患者　二四、死者　一三。
發疹窒扶斯患者　四。

明治廿七年傳染病

明治廿七年○紀元二五五四年。ノ東京市傳染病ハ、東京府統計書擧クル所左ノ如シ。

腸窒扶斯患者　九六五、死者　二四五。　寶布埜里亞患者　三七一、死者　二五五。
痘瘡患者　三二一、死者　九八。　赤痢患者　六七、死者　二二。
虎列刺患者　二〇、死者　一一。　發疹窒扶斯　一一、死者　二。

明治廿八年虎列刺

廿八年○明治○紀元二五五五年。東京虎列刺流行ス。即チ五月廿四日○明治廿八年(紀元二五五五年)。神田區○市内。ニ發スル者ヲ初發トシ、十二月十七日○明治廿八年(紀元二五五五年)。病勢全ク衰滅ス。此間ノ患者總數三千四百二十四人、内市部二千九百九十四人、死亡二千五百九十七人、内市部二千二百六十一人ニ及ブ。其病因ニ二有リ、一ハ清國出征軍隊ノ流行地ヨリ

明治廿八年腸窒扶斯

明治廿八年虎列刺事蹟

病毒ヲ齎シタル者、二ハ特發ニ係ル者是也。○明治廿八年虎列刺病流行記事。東京府統計書。

其他腸窒扶斯患者千五百八十五人、內市部千十一人、亦是年○明治廿八年(紀元二五五五年)ヲ以テ出ヅ。○東京府統計書。

明治廿八年虎列刺　ノ特ニ東京ニ於テ激烈ナリシハ、歸還清國出征軍隊ノ病種ヲ輸入シタル者ヲ主因トス。初發患者ノ陸軍少尉ナルガ如キ、其證也。

病毒ノ發熄

本年○明治廿八年(紀元二五五五年)。虎列刺病毒ノ初メテ府下○東京。ニ發生セシハ五月二十四日○明治廿八年(紀元二五五五年)。ニシテ、其全ク衰滅ニ歸セシハ十二月十七日○明治廿八年(紀元二五五五年)。即チ臨時檢疫部閉鎖ノ後二日ナリ。此間該病ニ罹リシモノ實ニ三千四百二十四名ナリキ。

流行ノ進路

五月二十四日○明治廿八年(紀元二五五五年)。神田區表神保町○市內。旅人宿ニ於テ俄然虎列刺患者一名發生セリ。之ヲ本年○明治廿八年(紀元二五五五年)。最始ノ患者トス。續テ翌二十五日○明治廿八年(紀元二五五五年)五月。患者一名又同旅人宿ニ發生セリ。同○明治廿八年(紀元二五五五年)五月。二十六日麹町區三丁目○市內。途上ニ於テ一名發生シ、同○明治廿八年(紀元二五五五年)五月。二十七日ヨリ六月一日○明治廿八年(紀元二五五五年)。ニ至ルマテ麻布區○市內。ニ四名續發セリ、同○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。三日日本橋區富澤町○市內。及松島町○市內日本橋區。ニ二名、同○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。四日北豐島郡板橋町○武藏國。及小石川區諏訪町○市內。ニ各一名、品川停車場ニ於テ米國人一名該病ニ罹レリ。同○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。六日京橋區築地四丁目○市內。ニ一名、同○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。八日淺草區千束町、向柳原町○市內。ニ各一名、九日○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。京橋區鹽町○市內。ニ一名、十日○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。ヨリ十二日○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。ニ至ルノ間陸軍監督部豫備病院內ニ二名、十三日○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。北豐島郡瀧ノ川村○武藏國。ニ一名、十五日○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。南豐島郡○武藏國。陸軍豫備病院第三分院ニ一名、四谷區鮫ヶ橋○市內。ニ二名、本郷區本郷五丁目○市內。ニ一名、北多摩郡神代村○武藏國。ニ一名、十六日○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。日本橋區富澤町、下谷區竹町及赤坂區新坂町、本所區林町○以上市內。ニ各一名、十七日○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。神田區佐久間町及淺草區龜岡町○市內。ニ各一名、十八日○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。荏原郡羽田村○武藏國。及深川區東元町○市內。ニ各一名、陸軍豫備病院內ニ二名、十九日○明治廿八年(紀元二五五五年)六月。深川區富川町及神田區錦町、西紅梅町○以上市內。

南豐島郡（武藏國。）陸軍豫備病院第三分院ニ各一名ヲ出シ、二十日（明治廿八年紀元二五五年六月。）ニ至リ本郷區眞砂町及淺草區地方今戸町・吉野町（以上市內。）南葛飾郡砂村（武藏國。）等ノ各處ニ發シ、逐日各區郡ニ傳播セリ。斯ノ如ク本年（明治廿八年紀元二五五年。）ハ病毒散在性ニシテ、同日各郡區ニ散發シ、病勢ノ進路一系ニ認メ難キモノアリ。

發病ノ系統及感染ノ因由

一、本年（明治廿八年紀元二五五年。）府下（東京。）ニ流行シタル虎列刺病ハ、之ヲ既往數年ニ於ケル府下（東京。）ノ流行ニ比スレバ、其病勢相同シカラス。病毒頗フル惡性ニシテ、溽暑ノ候ニ先タチ既ニ病芽ヲ發シ、寒冷ノ候ニ至レルモ尙衰滅ノ色ナカリシ。斯ノ如ク持續的ニ流行シ、且病毒一時ニ散蔓セシヲ以テ、病系秩然トシテ明確ナルモノ極メテ少ナリ。然レトモ要スルニ其病因ニ二アルヲ見ル。即チ一ハ征清軍隊軍夫等ノ流行地方ヨリ其病種ヲ齎來シタルモノト、一ハ飲料水及食物ノ不良ニシテ病毒ヲ特發シタルモノトニ由リ、逐次相感染傳播セシハ良ヤ疑ヲ容ルヘカラサルモノヽ如シ。左ニ其病系ノ明確ナリト認メタルモノニ就キ、之ヲ市郡ニ別チテ列記スヘシ。

神田區（市內。）

一、本區（市內神田區。）ニ於テハ流行地方ヨリ輸入シタル病毒ニ罹ルモノ凡二アリ。初五月二十四日（明治廿八年紀元二五五年。）本區（市內神田區。）表神保町三番地旅人宿ニテ患者一名發生セリ、是本年（明治廿八年紀元二五五年。）府下（東京。）虎列刺患者ノ嚆矢ナリ。該患者ハ陸軍工兵少尉ニシテ、當時廣島（安藝國。）ヨリ歸京セシモノニシテ、其糞便中ニハ明ニ虎列刺病菌ヲ認メタリ。續テ翌二十五日（明治廿八年紀元二五五年五月。）同宿ノ陸軍工兵大尉某發病セリ。其症狀極メテ輕易ナリシト雖、亦糞便中黴菌存在セリ。蓋シ後患者ハ、前患者ノ爲メ一時看護ノ任ヲ執リ、親シク之ニ觸接セシモ、其病毒ニ感染シテ發セシモノナリシヤ、將タ流行地ヨリ帶來セシモノナルヤ明瞭ナラズ。然レトモ爾後同所復一患者ヲ發生セザリシハ、蓋シ消毒ノ法其宜ヲ得タルニ由ルナラン。其後六月十九日（明治廿八年紀元二五五年。）錦町一丁目一番地（市內。）旅人宿ニ於テ一患者ヲ發生セリ。患者ハ陸軍臨時測圖手ニシテ、六月十二日（明治廿八年紀元二五五年。）大連灣（清國。）ヲ出發シ、同（明治廿八年紀元二五五年六月。）十五日宇品（安藝國。）ニ着シ、直ニ汽車ニテ歸京、初メテ該所ニ投宿シタルモノナリト云フ。幸ニシテ此病系ハ他ニ延長セザリシ。

一、七月十四日（明治廿八年（紀元二五五五年））。末廣町三十六番地（市内神田區）ニ於テ人力車夫一名發病セリ。同（明治廿八年（紀元二五五五年））七月。二十三日之ト厠圊ヲ共用セル同番地居住者ノ一家ニテ二名續發シ、翌二十四日（明治廿八年（紀元二五五五年））七月。亦同家ヨリ一名發生セリ。先是該家ニ在テハ七月十九日（明治廿八年（紀元二五五五年））。一女子會々病ニ罹リ、纔ニ二回ノ吐瀉ヲ催フシ竟ニ斃レタルモ、主治醫之ヲ腦膜炎トナシ、成規ノ屆出ヲ爲サヽリシト云フ。其後前記ノ如ク、一家數名ノ虎列刺患者ヲ續生セシハ、其病毒彼人力車夫ヨリ此一女子ニ傳播シ、斯ク慘狀ヲ演ジタルモノナラン。

一、本區（市内神田區）ハ初發以降漸次患者ヲ增發シ、九月（明治廿八年（紀元二五五五年））。中旬ニ至リ、一旦其勢ヲ減殺シ、十月（明治廿八年（紀元二五五五年））。上旬病毒再燃、患者增加シ、勢極メテ猖獗、復タ前日ノ比ニアラズ。其最モ熾ナリシトキニ在テハ、一晝夜二十有餘名ノ多キニ至レリ。其發生ヲ繹ヌルニ、神田上水樋管ノ通スル所ハ患者夥多ニシテ、其樋管ノ通セサル所ハ比較的寡少ナリシ。是ニ由テ之ヲ觀レバ、其起因或ハ神田上水ニ關係セシモノヽ如シ。

日本橋區（市内）。

一、本區（市内日本橋區）。ハ流行地方ヨリ病種齎來ニ毫モ關係セサル府下患者發生ノ嚆矢ニシテ、六月一日（明治廿八年（紀元二五五五年））。初メテ富澤町、松島町（市内日本橋區）。ノ兩處ニ各一名發病シ、爾來同質ノ病毒各區郡ニ陸續發生セリ。

一、十月（明治廿八年（紀元二五五五年））。上旬俄然患者ヲ增發シ、病勢殆ンド神田區（市内）。ト相伯仲セリ。其傳播ノ媒介モ、亦神田上水ニ在ルモノヽ如シ。

小石川區（市内）。

一、本區（市内小石川區）。柳町ハ、元水田ニシテ、土地極メテ卑濕、其飲料井水ノ如キハ猶一ノ潴溜ノ如ク、汚水ノ滲透殊ニ甚ダシク、隨テ病毒モ亦特ニ蕃殖シ易シ。初メ同町（市内小石川區柳町）。二十九番地ニ患者一名發生セルヤ、醫治ヲ加ヘス、數日ヲ經過セリ、其死後ニ至リ始メテ屆出爲ニ病毒ヲ散蔓シ、同番地ニ於テ五名ノ患者ヲ續發セリ。是ニ於テ所轄警察署ハ、此病原或ハ彼ノ井水ニアランコトヲ察シ、消毒的洗滌ヲ行ヒタリシニ、爾後該所附近ニ患者ヲ絕チタリ。

一、巢鴨病院ハ九月十四日（明治廿八年（紀元二五五五年））。初メテ施療室ニ虎列刺患者發生セリ。蓋本病院入院患者ハ悉ク瘋癲者ニシテ、本患者ノ如キモ其病症ヲ推問スルニ由ナク、病系明確ナラザレモ、爾後院内虎列刺患者二十有八名ニ及ベリ。

故ニ病院ハ豫防上一時下痢患者二十餘名ヲ駒込病院ニ移シ、或ハ不潔ノ疊ヲ燒却シ、或ハ消毒掃除ヲ爲ス等種々ノ方法ヲ施シ、漸ク其發生ヲ杜絶スルヲ得タリ。

芝區（市内。）

一、七月二十四日（明治廿八年（紀元二五五五年）。）ヨリ八月五日（明治廿八年（紀元二五五五年）。）ニ至レルノ間、新橋（市内芝區。）鐵道局構内ニ於テ二十四名ノ患者續發セリ。而シテ患者ハ概ネ驛夫或ハ職工、人夫等ニシテ、其近傍ヨリ通勤セルモノ多シ。而シテ病毒ハ獨リ構内ニ止マラズ、構外ニ迸リ、其殘害ヲ被レルモノ鮮少ナラズ。惟フニ本年（明治廿八年（紀元二五五五年）。）四五月ノ交、汽車ノ往來甚ダ頻繁、乘客モ亦平常ニ倍蓰シ、車輛不潔ヲ極ム。其洗滌シタル汚水ハ漂フテ漏泄ノ道ナク、且乘客ノ用キシ折詰及殘肴等堆積セシモ、依然消毒ノ方行ハレス、斯ノ如ク荏苒經過シ來レルノ際、淫雨連旬汚水氾濫シ、芥溜ハ潴水ノ中ニ在テ腐敗醱酵シ、一見病魔ノ淵叢タルノ觀アリシガ、果然七月二十二日（明治廿八年（紀元二五五五年）。）ニ至リ病毒發生シ、塵芥取扱人夫先其患ニ罹リ、尋テ該芥溜ニ接近シタル西南ノ官舍及工場ニ及ビ、蔓リニ慘害ヲ極メタリ。蓋本構内ニハ處々ニ水道、井戸ノ設置アリテ、地下ニハ其線路縱横ニ埋沒セルヲ以テ、病毒或ハ該水道ニ入リ、斯クハ一時ニ續發シタルモノナラン。

一、八月二日（明治廿八年（紀元二五五五年）。）三田四國町二番地（市内芝區。）ニ於テ患者一名發生シ、其汚穢物ノ或ハ井水ニ混入セシ恐レアルニ由リ之ヲ消毒セシガ、其後同町（市内芝區三田四國町。）ニ十三名ヲ發シテ熄メリ。

一、伊皿子町四十七番地（市内芝區。）ニ於テハ八日間ニ十六名ノ多數患者ヲ續發セリ。初メ同町（市内芝區伊皿子町。）四十四番地ニ於テ吐瀉病患者一名發生セルヤ、該家人窃ニ其汚染シタル衣類ヲ同（市内芝區伊皿子町。）四十七番地ノ井戸流ニ於テ洗滌セリ。病毒爲メニ井水ニ混入シ、爲メニ此慘狀ヲ呈セシナルベシ。

下谷區（市内。）

一、六月十六日（明治廿八年（紀元二五五五年）。）竹町十六番地（市内下谷區。）ニ於テ患者一名發生セリ。該患者ハ淺草區福井町二丁目（市内。）ノ搗米屋ノ雇人ナリシガ、前日閑ヲ主人ニ請ヒ、本區（市内下谷區。）ニ來リ酒食ヲ恣ニシ、一旦主家ニ歸リ、本日（明治廿八年（紀元二五五五年）六月十六日。）發病ノ後、再ビ本區（市内下谷區。）ニ來リタルモノナリ。

一、八月十九日（明治廿八年（紀元二五五五年）。）下谷町二丁目四番地（市内下谷區。）ニ於テ女子一名

發病シ、同（○明治廿八年（紀元二五五五年）八月。）二十一日死後始メテ屆出タルヲ以テ、斯間病毒散蔓シ、二十九日（○明治廿八年（紀元二五五五年）八月。）ニ至リ八名ノ患者ヲ發生セリ。其感染ノ誘因ハ、患者ノ汚物ヲ井戸流ニ於テ洗濯シタルニ由ルナラン。

深川區（○市內。）

一、本區（○市內深川區。）ハ土地極メテ卑濕ニシテ、井水ノ如キハ殆ンド飲料ニ勝ヘ難ク、病勢モ亦他郡區ト異ナリ持續性ニシテ患者ノ數比較的多數ヲ占メリ。今其病系ノ最モ明確ナルモノヲ擧グレバ、本區（○市內深川區。）中最モ不潔ナル松村町（松村町。）十六十七兩番地ニ發生セル患者ニアルベシ。初メ七月二十五日（○明治廿八年（紀元二五五五年）。）本町（○市內深川區）テ病毒發生ノ箇所ハ此兩番地ニ跨リ、一ノ路次ヲ隔テ左右二列ニ併行シ、五棟二十九戸ヨリ成リ、惣雪隱及井戸水一個所アルノミ、故ニ病毒ノ傳播或ハ此等ノ關係ニ依リタルナラン。（○南葛飾郡略。）

一、以上列記ノ他、尙病系ノ顯然タルモノ二三ナキニシモアラズト雖モ、感染ノ誘因及傳播ノ媒介概ネ前者ト逕庭ナケレハ茲ニ贅セス。

明治廿八年虎列刺病流行記事

當時又舊監獄石川島支署及監獄市ケ谷支署モ病毒侵入シテ若干ノ患者ヲ出セリ。即チ左ノ如シ。

一、本年（○明治廿八年（紀元二五五五年）。）府下虎列刺病流行ノ際ニ方リ、舊監獄石川島支署及監獄市ケ谷支署モ亦惡疫侵害ノ災ニ罹リ、囚徒中患者ヲ發生セル百三十七名ニシテ、內監獄市ケ谷支署ハ僅ニ女囚一名ニ過キサリシ。斯ノ如ク舊監獄石川島支署ノミ獨リ其患者發生ノ數多キヲ占ムルハ、蓋シ其原因ナカルヘカラズ。曾ニ今回ノミナラス、之ヲ既往ニ徵スルニ、該支署ハ府下惡疫ノ流行毎ニ未ダ嘗テ病毒侵襲ノ患ヲ被ラサルナシ。蓋シ舊監獄石川島支署ノ囚徒ハ、市ケ谷支署ニ收容セル囚徒ト其種類ノ異ル所アリト雖モ、之ガ衞生的觀察ヲ下セハ、其職由スル所ハ、該支署ノ構造不完全ト、地質ノ汚濕及飲料水ノ不良ニアルヘシ。

明治廿八年虎列刺病流行記事

明治廿八年虎列刺病流行記事（○東京府統計書同。）載スル所ノ患者日計表ニ依ルニ、五月廿四日（○明治廿八年（紀元二五五五年）。）初發ヨリ十二月廿八日（○明治廿八年（紀元二五五五年）。）終熄ニ至ル間ノ市內各區患者數ハ、神田區（○市內。）發生三九六、全治九〇、死亡三〇六、麴町區（○市內。）發生一〇四、全治三二、死亡七二、麻布區（○市內。）發生六八、全治二五、死亡四三、日本橋

明治廿八年腸窒扶斯事蹟

區○市內。發生三七二、全治六二、死亡三一○、小石川區○市內。發生九八、全治三三、死亡六五、芝區○市內。發生二五二、全治八一、死亡一七一、京橋區○市內。發生二一二、全治四二、死亡一七○、淺草區○市內。發生二五三、全治五三、死亡二○○、四谷區○市內。發生三二、全治七、死亡二五、本郷區○市內。發生一○三、全治三○、死亡七三、下谷區○市內。發生一七八、全治四五、死亡一三三、赤坂區○市內。發生四五、全治一五、死亡三○、本所區○市內。發生二五八、全治五一、死亡二○七、深川區○市內。發生三八四、全治六四、死亡三二○、牛込區○市內。發生一○二、全治二七、死亡七五、監獄發生一三七、全治七六、死亡六一、合計發生二、九九四、全治七三三、死亡二、二六一、郡部南北豐島、南北多摩、東西多摩、荏原、南葛飾、南足立九郡○武藏國。合セテ發生四三○、全治九四、死亡三三六、市郡累計發生三、四二四、全治八二七、死亡二、五九七也。

明治廿八年腸窒扶斯　東京府統計書ニ據レバ明治廿八年○紀元二五五五年。度ニ於ケル東京市ノ腸窒布斯流行ハ、

腸窒扶斯○明治廿八年(紀元二五五五年)

區	患者	死者	區	患者	死者
麴町	六九	一二	神田	一三七	四二
日本橋	一○三	三四	京橋	六六	二五
芝	一二八	三八	麻布	四三	九
赤坂	二九	八四	谷	三八	一一
牛込	三四	一二	小石川	四五	一一
本郷	八六	二三	下谷	八三	二二
淺草	九五	三○	本所	三七	一六
深川	二七	一二	市	一○一	三○四

外ニ監獄患者二人・死者一人有リ。

ニシテ、東京府郡部ヲ合スレハ患者一千五百八十三人、死者四百十五人有リ。其流行全年ニ亘リ、就中九月○明治廿八年(紀元二五五五年)ノ患者二百廿四人、十月○明治廿八年(紀元二五五五年)ノ二百十二人、八月○明治廿八年(紀元二五五五年)ノ二百九人ヲ最モ多シトシ、三月○明治廿八年(紀元二五五五年)ノ五十三人、二月○明治廿八年(紀元二五五五年)ノ六十三人、四月○明治廿八年(紀元二五五五年)ノ六十七人ヲ最モ少シトス。

附記　明治廿八年布哇埠里亞其他

〔附記〕明治廿八年○紀元二五五五年。ニ於ケル東京市ノ傳染病中、實布埠里亞其他帝都時代ノ疫癘ハ左ノ如シ。亦東京府統計書ニ據ル。

實布垤里亞患者　七一二、　死者　一八五。　赤痢患者　一一七、　死者　三九。
痘瘡患者　三〇、　死者　四。　發疹窒扶斯患者　五、　死者　二。

明治廿九年痘瘡

廿九年（明治二五五六年。紀元）東京市痘瘡流行シ、患者二千三百六十六人、死者六百九十人ヲ出ス。是年（明治廿九年元二五五六年。紀）腸窒扶斯亦一千九百五十一人ノ患者六百三人ノ死者ヲ出シ、實布垤里亞一千十四人ノ患者、二百十九人ノ死者ヲ出ス。（東京府統計書。摘要。）

明治廿九年腸窒扶斯

明治廿九年實布垤里亞

明治廿九年痘瘡事蹟

明治廿九年痘瘡　東京府統計書（明治廿九年紀元二五五六年）○痘瘡

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	四四	六	神田	三一〇	八二
日本橋	一八二	四四	京橋	一六一	四九
芝	五二	一二	麻布	一五	八
赤坂	五	一	谷	二一	九
牛込	五二	一四	小石川	二八	八
本郷	八二	一二	下谷	二一一	六一
淺草	五九九	一九六	本所	三八一	一〇八

明治廿九年腸窒扶斯事蹟

外ニ監獄患者八人、死者一人有リ。

深川	二一三	八〇	市	二三六六	六九〇

之ニ東京府郡部ヲ合スレハ患者二千四百九十五人、死者七百十九人ニシテ、一月卅日（明治廿九年紀元二五五六年。）ヲ初發トシ、十二月卅一日（明治廿九年紀元二五五六年。）ニ及ビ、五月（明治廿九年紀元二五五六年。）ヲ中心トシテ流行シ、九月（明治廿九年紀元二五五六年。）ニハ患者郡市ヲ合シテ僅ニ十四人ニ下リシモ、十一月（明治廿九年紀元二五五六年。）ニハ俄然三百九十四人ニ上リ、以テ十二月（明治廿九年紀元二五五六年。）ノ一千二百五十九人ニ達ス。（東京府統計書。東京府衞生年報。）

明治廿九年腸窒扶斯　患者郡市合シテ二千九百卅三人、市部一千九百五十一人、死者郡市合シテ七百七十六人、市部六百三人（東京府統計書。）ニシテ、其區別左ノ如シ。

腸窒扶斯（明治廿九年紀元二五五六年）

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	二二四	三〇	神田	三六一	一一四
日本橋	二四〇	七八	京橋	一二九	四八

帝都時代ノ疫癘

明治廿九年實布垤里亞事蹟

外ニ監獄患者三人、死者二人。

流行全年ニ亘リ、中ニ就テ九月（明治廿九年（紀元二五五六年））ヲ最多、十二月（明治廿九年（紀元二五五六年））ヲ最少トス。（東京府統計書）

—東京府統計書（摘要）

明治廿九年實布垤里亞　東京府統計書ニ據レハ、明治廿九年（紀元二五五六年）度ノ東京實布垤里亞ハ、郡市合計患者一千百五十人、死者二百七十人、市部患者一千十四人、死者二百十九人也。

實布垤里亞（明治廿九年（紀元二五五六年））

區	患者	死者
麹町	七五	二
神田	七〇	一五
芝	二三七	二五
赤坂	三八	一五
牛込	八八	二一
本郷	一一九	三四
淺草	一四四	四二
深川	七八	六〇三
麻布	六〇	二五
谷	六四	一五
下谷	三五	二一
小石川	一八	三四
本所	四七	四二
市	三〇	六〇三
日本橋	九〇	二〇
芝	一七八	六九
赤坂	七三	四六
牛込	五一	一九
本郷	五九	七七
淺草	八五	二九
深川	三〇	一九
京橋	二四	二〇
麻布	二二	六六
谷	二四	一九
小石川	九	八二
下谷	一三	二八
本所	三六	一九
市	一〇	二一
計	一一八〇	二五〇

流行期ハ周年ニ亘リ、殊ニ十二月十一月（明治廿九年（紀元二五五六年））ヲ多シトシ、八月七月（明治廿九年（紀元二五五六年））ヲ少シトス。

附記　明治廿九年赤痢其他

〔附記〕明治廿九年（紀元二五五六年）度ノ東京市ニ於ケル赤痢虎列刺發疹窒扶斯ノ流行ハ、

赤痢患者　三三〇、死者　五五。　虎列刺患者　二八八、死者　二二五。
發疹窒扶斯患者　三、死者　一。

ニシテ、就中赤痢ハ、市内ノ流行未ダ甚シキニ至ラサリシト雖、東京府郡部ニ在リテハ、患者一千卅二人、死者二百九十九人ヲ出シ、是年（明治廿九年（紀元二五五六年））ニ於ケル第一ノ流行病タリ。而シテ其最モ多ク流行シタルハ八九十ノ三箇月

帝都時代ノ疫癘

也。初發ハ一月五日○明治廿九年(紀元二五五六年)。ニ在リ。○東京府衛生年報。東京府統計書。

明治卅年麻疹

卅年○明治卅年(紀元二五五七年)。東京麻疹流行シ、一月○明治卅年(紀元二五五七年)。ヨリ五月○明治卅年(紀元二五五七年)。ニ至リ、患者五萬八千七百七十一人、死者八百八十四人ヲ出ス○日本傳染病小史。是年○明治卅年(紀元二五五七年)。痘瘡亦大ニ行ハレ、患者六千百廿五人、内市部五千五百五人、死者二千六十六人、内市部一千九百十七人有リ。○東京府統計書。東京府衛生年報。

明治卅年痘瘡

明治卅年赤痢

赤痢ハ患者六千九百九人、内市部一千八百十九人、死者二千百四十六人、内市部六百八十人ヲ出シ、○東京府統計書。東京府衛生年報。實布垤里亞ハ患者二千三百四十五人、内市部二千十九人、死者六百六十九人、内市部五百十二人ヲ出シ、○東京府統計書。東京府衛生年報。腸扶窒斯ハ、患者一千五百五十人、内市部一千五十四人、死者三百五十一人、内市部二百五十三人ヲ出ス。○東京府統計書。東京府衛生年報。

明治卅年實布垤里亞

明治卅年腸窒扶斯

明治卅年麻疹事蹟

明治卅年麻疹　明治卅年○紀元二五五七年。麻疹ノ大流行有リタルコトハ、日本傳染病小史ニ、左ノ如ク見ユ。

明治卅年痘瘡事蹟

一八九七年○明治卅年(紀元二五五七年)。は、東京市内に於て同年○明治卅年(紀元二五五七年)。一月より五月に至る間に、五萬八千七百七十一人の患者及八八四の死者を出せり。

明治卅年痘瘡　ハ、患者總數六千百廿五人、内市部五千五百五人、死者總數二千六十六人、内市部一千九百十七人ヲ出シ、一二三月○明治卅年(紀元二五五七年)。間ノ流行ニ係ル。此外四月五月十一月○明治卅年(紀元二五五七年)。等ニ多少ノ患者アリタリ。○東京府統計書。

痘瘡○明治卅年(紀元二五五七年)

區	患者	死者	區	患者	死者
麴町	一一三	二八	神田	六〇九	二三〇
日本橋	四三六	一三〇	京橋	七九四	二一一
芝	四四四	一四三	麻布	一二一	四二
赤坂	四五	二〇	四谷	五七	一七
牛込	一〇七	三一	小石川	九七	二八
本郷	一九八	六五	下谷	一四二	二二六
淺草	七三二	二九九	本所	六九一	二七三
深川	六八五	二七四	市	五五〇五	一九一七

外ニ監獄患者六人、死者三人有リ。

明治卅年赤痢事蹟

明治卅年赤痢　全年ニ亘ルト雖、其最モ甚シキハ、七八九十ノ四箇月ニシテ、八月〇明治卅年(紀元二五五七年)。ノ如キ三千三百六十人ノ患者ヲ出シタリ。此外十一月五月十二月〇明治卅年(紀元二五五七年)。亦廿五人以上百廿九人ニ至ル患者有リ。其總數患者六千九百九人、内市部一千八百十九人、死者二千百四十六人、内市部六百八十人也。〇東京府統計書。

赤痢〇明治卅年(紀元二五五七年)

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	九四	二五	神田	四四六	一四三
日本橋	九七	四五	京橋	一六四	七五
芝	二四二	八二	麻布	二二	一一
赤坂	三〇	一一	谷	五〇	一八
牛込	六九	二二	小石川	九四	三六
本郷	一一九	四五	下谷	一二〇	五〇
淺草	一五一	六四	本所	六九	三二
深川	五二	二〇	市	一八一九	六八〇

外ニ監獄患者十二人、死者二人有リ。

明治卅年實布垤里亞事蹟

明治卅年實布垤里亞　東京府統計書ニ據ルニ、

實布垤里亞〇明治卅年(紀元二五五七年)

區	患者	死亡	區	患者	死亡
麹町	六八	一四	神田	二三八	八七
日本橋	八八	二四	京橋	八九	二三
芝	七五七	一三〇	麻布	三六	一二
赤坂	四三	三	谷	三三	一〇
牛込	九八	三二	小石川	三九	一一
本郷	一〇七	二五	下谷	一三八	三五
淺草	一二七	五二	本所	九五	一八
深川	六三	二二	市	二〇一九	五一二

明治卅年腸窒扶斯事蹟

ニシテ、之ニ東京府郡部ヲ合スレバ患者二千三百四十五人、死者六百六十九人有リ。流行ハ全年ニ亘リ、内五月三月四月十二月十一月〇明治卅年(紀元二五五七年)。ニ於テ二百人以上ノ患者ヲ出シ、二月一月十月九月〇明治卅年(紀元二五五七年)。ニ於テ百人以上ノ患者ヲ出ス。

明治卅年腸窒扶斯　東京府統計書ニ據ルニ、亦全年ニ亘リ流行シ、九月〇明治卅年(紀元二五五七年)。ハ二百人以上ノ患者ヲ出シ、八月十月十一月六月一月四月五月七月十

帝都時代ノ疫癘

二月〇明治卅年(紀元二五五七年)。ハ百人以上ノ患者ヲ出シタリ。患者總數一千五百五十人內市部一千五十四人、死者總數三百五十一人、內市部二百五十三人也。

腸窒扶斯〇明治卅年(紀元二五五七年)

附記 明治卅年虎列刺其他

區	患者	死者	區	患者	死者
麴町	六九	一八	神田	二二〇	五一
日本橋	一〇五	二六	京橋	六三	一六
芝	一三八	二三	麻布	二一	七
赤坂	二五	七	四谷	二五	四
牛込	四四	九	小石川	二七	六
本郷	八五	一五	下谷	三九	一二
淺草	一一二	二九	本所	四八	一八
深川	三三	一二	市	一〇五四	二五三

〔附記〕明治卅年〇紀元二五五七年。ノ東京市內ニ於ケル虎列刺猩紅熱發疹窒扶斯ハ、東京府統計書ニ左ノ如ク見ユ。

虎列刺患者九三、死者四六。猩紅熱患者三〇、死者三。發疹窒扶斯患者一。

〔參考〕明治卅年東京府衞生年報云フ、

明治卅一年 寅布垤里亞 明治卅一年 腸窒扶斯

本年(〇明治卅年紀元二五五七年)發生ノ傳染病患者總數ハ一萬七千百四十二人ニシテ、死亡五千三百〇一人ヲ出シ、之ヲ昨二十九年(〇紀元二五五六年)患者總數八千二百七十六人ニ比スレハ、八千八百六十六人ヲ增加シ、殆ト二倍以上ノ增加ヲ示セリ。是レ本年(〇明治卅年紀元二五五七年)ハ痘瘡及赤痢二病大ニ流行セシニ由ル。而シテ患者ノ內譯ヲ擧クレハ、虎列刺百十四人、赤痢六千九百二十一人、(〇東京府統計書ニ同シカラサルハ、伊豆七島小笠原島乃至監獄患者等ヲ合算シタルニ因ル。下同シ)腸窒扶斯千五百六十二人、痘瘡六千百六十人、發疹窒扶斯三人、猩紅熱三十七人、寅布垤里亞二千三百四十五人ニシテ、ペストハ全ク發生ナシ。今本年(〇明治卅年紀元二五五七年)各病患者百人ニ付、死亡ノ比例ヲ見ルトキハ、虎列刺ハ五十人、赤痢ハ三十一人二分一厘、腸窒扶斯ハ三十人四分一厘、痘瘡ハ二十八人三分三厘、發疹窒扶斯ハ三十三人三分三厘、猩紅熱ハ八人一分一厘、寅布垤里亞ハ二十八人五分三厘ニシテ、其總計ノ比例ハ三十人九分二厘ナリ。又各病ニ就キ、發生最多ノ月ヲ最近十ヶ年ノ統計ニヨリ調査スルニ、虎列刺ハ八九十ノ三ヶ月、寅布赤痢ハ七八九ノ三ヶ月、腸窒扶斯ハ八九十ノ三ヶ月、痘瘡ハ一二三ノ三ヶ月、寅布垤里亞ハ三四五十二ノ四ヶ月尤モ多シ。發疹窒扶斯及猩紅熱ニ至テハ發生數僅少ナルヲ以テ、今遽ニ調査ノ料ニ供シ難シ。(〇下略)

卅一年 〇明治〇紀元二五五八年。 東京市寅布垤里亞流行ス。患者一千四百卅四人、死者二百七十八人有リ。腸窒扶斯亦一千二百五十九人ノ

帝都時代ノ疫癘

明治卅一年實布垤里亞事蹟

患者三百廿六人ノ死者ヲ出ス。○東京府統計書。

明治卅一年實布垤里亞　全年ニ亘リテ流行シ、就中二月三月四月（○明治卅一年（紀元二五五八年））ヲ最モ多シトシ、五月十一月十月十二月（○明治卅一年（紀元二五五八年））之ニ亞グ、東京府內ノ患者一千八百十四人、內市部一千四百卅四人、死者四百十六人、內市部二百七十八人也。

實布垤里亞○明治卅一年（紀元二五五八年）

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	一〇九	九	神田	一三七	三一
日本橋	八七	一六	京橋	九〇	二〇
芝	二〇一	一九	麻布	六〇	八
赤坂	一〇三	八	四谷	四二	五
牛込	七七	一三	小石川	五二	一六
本郷	一〇五	二六	下谷	一一二	二八
淺草	一〇三	三二	本所	七九	二六
深川	七七	二一	市	一四三四	二七八

明治卅一年腸窒扶斯事蹟

明治卅一年腸窒扶斯　東京府統計書ニ據ルニ、腸窒扶斯○明治卅一年（紀元二五五八年）

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	六三	一〇	神田	一七一	四一
日本橋	一〇九	二六	京橋	一〇一	三五
芝	一八〇	四七	麻布	四五	一一
赤坂	二〇	七	四谷	二一	六
牛込	六一	一一	小石川	一三〇	二九
本郷	九九	二六	下谷	六一	一七
淺草	一〇七	三〇	本所	五一	一五
深川	四〇	一五	市	一二五九	三二六

附記　明治卅一年赤痢其他

郡部ヲ合スレハ患者一千六百六十二人死者四百十人也。流行期ハ全年ニ亘ルト雖、其最モ多ク患者ヲ出シタルヲ十月九月十一月八月（○明治卅一年（紀元二五五八年））トシ之ニ次クヲ十二月二月七月（○明治卅一年（紀元二五五八年））トス。

〔附記〕明治卅一年（○紀元二五五八年。）東京市ニ於ケル赤痢其他ノ傳染病ハ、東京府統計書ニ據ルニ、實ニ左ノ如キヲ見ル。

帝都時代ノ疫癘

赤痢患者　九七三、死者　三〇九。　虎列刺患者　六三、死者　二二。
猩紅熱患者　二三、死者　一。　痘瘡患者　一五、死者　一。
發疹窒扶斯患者　一、死者　一。

明治卅二年腸窒扶斯

卅二年〇明治〇紀元二五五九年。東京市腸窒扶斯流行ス。患者一千二百一人、死者三百十四人有リ。〇東京府統計書。

明治卅二年腸窒扶斯事蹟

明治卅二年腸窒扶斯　東京府統計書ニ據レハ、腸窒扶斯〇明治卅二年(紀元二五五九年)

區	患者	死者	區	患者	死者
麴町	九六	一二	神田	二二三	五七
日本橋	六三	一六	京橋	七六	二七
芝	一六七	三七	麻布	三七	一二
赤坂	二一	四	四谷	三一	一一
牛込	六三	一一	小石川	五二	一三
本郷	一二四	二九	下谷	五四	二〇
淺草	七七	二九	本所	六一	二二
深川	五六	一四	市	一二〇一	三一四

郡部ヲ合スレハ患者一千六百七十八人、死者四百卅八人也。八月九月七月十月〇明治卅二年(紀元二五五九年)。ヲ中心トシテ周年ノ流行ヲ見タリ。

附記　明治卅二年實布埜里亞其他

〔附記〕明治卅二年〇紀元二五五九年。ニ於ケル東京市ノ實布埜里亞其他ハ、東京府統計書ニ左ノ如ク有リ。

實布埜里亞患者　九六二、死者　一八七。　赤痢患者　九三四、死者　一八三。
虎列刺患者　二一、死者　一〇。　猩紅熱患者　二三、死者　一。
痘瘡患者　九。

明治卅三年實布埜里亞

卅三年〇明治〇紀元二五六〇年。東京市實布埜里亞流行シ、患者一千百廿九人、死者二百廿四人ヲ出ス。〇東京府統計書。

明治卅三年實布埜里亞　周年流行ヲ見、殊ニ三月一月二月五月四月十二月十一月〇明治卅三年(紀元二五六〇年)。ヲ以テ多ク患者ヲ出シタリ。東京府內患者一千四百八十人內市部一千百廿九人、死者三百廿八人部市部二百廿四人。〇東京府統計書。

實布埜里亞〇明治卅三年(紀元二五六〇年)

區	患者	死者	區	患者	死者

帝都時代ノ疫癘

麴町	八二	八	神田	一一三	三〇
日本橋	七三	一三	京橋	九三	一八
芝	一五四	二六	廓布	九〇	一三
赤坂	四一	六	四谷	三一	六
牛込	五三	七	小石川	三五	八
本郷	三六	六	下谷	六三	一一
淺草	一〇六	二八	本所	九二	二九
深川	六七	一五	市	一一二九	二二四

附記　明治卅三年腸窒扶斯其他

〔附記〕明治卅三年〇紀元二五六〇年。東京市ニ於ケル腸窒扶斯其他ノ流行、亦東京府統計書ニ見ユ。

腸窒扶斯患者　九六六、死者　三一〇。　赤痢患者　五二八、死者　一〇一。
猩紅熱患者　一四、死者　一。　虎列刺患者　六、死者　五。
痘瘡患者　四。　發疹窒扶斯患者　三、死者　一。

明治卅四年〇紀元二五六一年。東京市ニ於ケル腸窒扶斯其他ノ流行ハ、東京府統計書ニ據ルニ左ノ如シ。

腸窒扶斯患者　九七五、死者　二八五。　赤痢患者　四五一、死者　八四。
痘瘡患者　二五、死者　二。　猩紅熱患者　一三、死者　一。

明治卅五年腸窒扶斯其他

實布垤里亞患者　九一一、死者　二一〇。　虎列刺患者　三、死者　三。

內、腸窒扶斯ハ、郡部ヲ合スレバ、患者一千三百七十二人、死者三百八十六人、實布垤里亞ハ患者一千二百十八人、死者三百十六人有リ。

明治卅五年ベスト

明治卅五年〇明治二五六二年。十二月廿四日本所區〇市內。押上町ニペスト發生ス。是ペストノ東京ニ侵入シタル嚆矢ニシテ、卅六年〇明治二五紀元二五六三年。一月中旬ニ至リ、患者總數十四人死亡九人ヲ出シテ終熄ス。後六月〇明治卅六年紀元二五六三年。一人ノ患者有リ。〇ペスト豫防錄。警視廳東京府公報。是歲〇明治卅五年紀元二五六二年。又實布垤里亞ノ流行有リ。〇東京府統計書。

明治卅五年ベスト

明治卅五年〇紀元二五六二年。十二月廿四日本所區〇市內。押上町東京瓦斯紡績株式會社女工寄宿舍內ニペスト發生ス。ペストノ東京ニ入ルヲ始トス。

明治卅五年ベスト事蹟

東京市ニ於テ初メテ「ペスト」豫防ノ策ヲ講セシハ、明治三十三年〇紀元二五六〇年。ニシテ「ペスト」患者ノ發生セシハ、三十五六年〇明治二五紀元二五六二年。二五六三年。及三十八年〇明治五六〇紀元二五六五年。ナリ。其間病毒ノ侵襲ヲ防キ、其慘害ヲ被ラサランカ爲メ、年々歲帝都時代ノ疫癘

々防疫的ノ施設ヲ企畫セサルハナシ。○中略。

明治卅二年○紀元二五五九年。十月卅日臺灣基隆港ヨリ郵船會社汽船近江丸ニ便乘シ、船中ニ於テ發病シ、十一月二日○明治卅二年○紀元二五五九年。門司港○長門國。ヲ經テ廣島市○安藝國。ニ到リ、旅亭鶴水館ニ投宿中、同月○明治卅三年○紀元二五五九年。十一月。五日死亡セル神奈川縣人澤田松五郎ノ死躰ハ、檢案ノ結果「ペスト」病ナリト決定ス。是ヲ本邦內地ニ於ケル「ペスト」患者發生ノ嚆矢トナス。

尋テ同年○明治卅二年○紀元二五五九年。十月「ペスト」流行地ナル孟買○印度。ヨリ、綿花並ニ其他ノ貨物ヲ積載シ、古倫母、新嘉坡、香港等ヲ經テ十月七日○明治卅二年○紀元二五五九年。神戸○攝津國。ニ入港セル鹿兒島丸ハ、該病毒ヲ齎ラシ來リ、十一月八日○明治卅二年○紀元二五五九年。神戸市萱合町濱邊通五丁目○攝津國。山本幸一ハ「ペスト」病ニ罹リ死亡セシヨリ、卅三年○明治卅二年○紀元二五六〇年。一月十三日迄ニ、同市○神戸市。ニ於テ四十一人ノ患者ヲ續發スルニ至レリ。而シテ此病毒ノ傳播ハ、大阪市○攝津國。ヲ襲ヒ、卅二年○明治卅二年○紀元二五五九年。十一月二十日同市○大阪市。西區幸町三丁目○攝津國。橋本フサヲ初發トシ、爰ニ猛毒ヲ逞フシ、翌卅三年○明治卅二年○紀元二五六〇年。九月中旬ニ至ルノ間、患者ノ總數百六十一人、中百四十六名ノ死亡者ヲ出シ、以テ稍ヤ終熄ヲ告ケタリ。而シテ當年○明治卅三年○紀元二五六〇年。ニ於ケル慘害ハ以上ノ二市ニ止マラズ、福岡○筑前國。和歌山○紀伊國。長崎○肥前國。靜岡○駿河國。等ノ各地方ニ傳播セルモ、幸ニシテ病勢ヲ逞フセスシテ終熄セリ。當時本市○東京市。ニ於テハ、之レカ豫防トシテ鼠族驅除ヲ勵行シ、三十三年○明治卅二年○紀元二五六〇年。一月十五日疫施設ノ一タル捕鼠買收ノ嚆矢トス。

明治三十四年○紀元二五六一年。五月二十一日帝國大學醫科構內ニテ捕獲セル鼠族中ヨリ、五頭ノ有菌鼠ヲ發見ス。是レヲ東京市中ニ於ケル「ペスト」鼠發見ノ初メトシ、一時滿都ノ人心ヲシテ驚愕セシメシモ、同構內ノ鼠族驅除並ニ消毒法ト相俟テ、此ノ一局部ニ止マリ、其餘毒ヲ他方面ニ及ホサヽリシハ、偏ニ幸福トスル所ナリシ。

三十五年○明治卅二年○紀元二五六二年。八月中、橫濱港○武藏國。ニ輸入セラレタル海外綿花ニ因リ、病毒ヲ齎ラシ來リ、十月○明治卅五年○紀元二五六二年。同市○橫濱市。「ペスト」患者發生セルノミナラズ、該綿花ハ轉々シテ、東京市本所區押上町東京瓦斯紡績株式會社ニ購入セラレ、同社女工加藤ノセ之ニ感染ス。是レ三十五年○明治卅二年○紀元二五六二年。十二月二十四日ニシテ、本市○東京市。ニ於ケル「ペスト」患者發生ノ起源トス。尋テ社內

ニ患者續發シ、其數十三名ニ上リ、有菌鼠ヲ出スコト四十八頭ノ多キニ達セリ。此時ニ當リ、本市（東京市。）ハ、防疫施設ノ周到ヲ期センカ爲メ、特ニ豫防事務所ヲ置キ、同時ニ豫防委員ヲ設ケ、以テ專ラ防疫事務ニ鞅掌セリ。其後卅六年（明治五六年。）六月六日ニ至リ、又同區（市內本所區。）松倉町二丁目ニ一名ノ患者發生セリ。而シテ其傳染ノ系路ニ就テ考フルニ、本患者ノ、直接同社ニ關係アルヲ認メズ、恐クハ一月（明治卅六年元紀元二五六三年。）以降、區內（東京市本所區。）ニ有菌鼠續出セシヲ以テ、此等ノ病毒ニ接觸セシモノナランカ。爾來三十七年（明治四〇紀元二五六四年。）六月ニ至ルノ間、淺草・下谷・神田・日本橋・赤坂・四谷（以上市內。）ニ亘リ、有菌鼠ヲ發見シタルモ、大事ヲ釀スニ至ラズシテ、一時中絕セリ。

三十五年（明治〇紀元二五六二年。）十二月二十四日午後七時本所區押上町（市內。）東京瓦斯紡績株式會社ノ管理醫士ヨリ、同寄宿舍內病室ニ三名ノ「ペスト」疑似患者ノ屆出アリ。之ト前後シテ東京醫科大學教授醫學博士緒方正規氏ヨリモ、同社ヘ工女加藤ノセナル者ノ病的材料ニ就キ、細菌學的檢査ヲ施行セシ結果「ペスト」病ナリト決定シタル旨報告セラレタリ。是ヲ本市（東京市。）內ニ於ケル「ペスト」病患者發生ノ嚆矢ナリトス。爾後十數名ノ患者ヲ續出シ、三十六年（明治〇〇紀元二五六三年。）六月ニ至リ漸ク止熄ス。本市（東京市。）中「ペスト」病第一回ノ流行之ナリ。當時ノ患者ハ左表ノ如シ。

「ペスト」病患者一覽表（自卅五年十二月至卅六年六月）

號	氏名	年齡	職業	發病月日	注意患者トシタル月日	診定シタル月日	送院シタル月日	鏡檢成蹟	轉歸
一	加藤ノセ	二五	紡績工女	卅五年十二月十七日	十二月二十四日	十二月廿四日	十二月廿五日	陽	卅六年三月七日全治
二	吾妻ミヨノ	二五	同上	不明	同上	同上	同上	陰	同年二月十九日全治
三	石塚ハナ	一三	同上	同上	同上	同上	送院前死亡	陽	卅五年十月廿五日死亡
四	吾妻リエ	一八	同上	卅五年十二月廿四日	十二月廿五日	十二月二十五日	十二月廿五日	陽	十二月三十日死亡
五	高橋サト	一八	同上	十二月廿六日	十二月廿六日	十二月二十六日	十二月廿六日	陽	十二月二十七日死亡
六	荒井ツキ	一四	同上	十二月廿五日	十二月二十八日	同廿八日	十二月廿八日	陽	卅六年一月一日死亡
七	土屋サヨ	一八	同上	十二月二十二日	十二月三十一日	卅六年一月一日	卅六年一月一日	陽	卅六年一月五日死亡
八	高橋スイ	一九	同上	十二月三十一日	卅六年一月一日	卅六年一月一日	同一月二日	陽	卅六年一月十一日死亡
九	相原チヨノ	一六	同上	卅六年一月一日	卅六年一月二日	卅六年一月三日	卅六年一月三日	陽	卅六年三月七日全治
一〇	吉荒トメ	一五	同上	卅六年一月三日	卅六年一月三日	同上	同上	陽	卅七年一月四日死亡

一一	金山トミ	一四	同上	一月二日	一月四日	一月五日	一月五日	陽	八日死亡	一月
一二	小林トヤ	一九	同上	一月七日	一月八日	一月九日	一月九日	陽	三月七日全治	
一三	幸田ナツ	一一	同上	一月十日	一月十日	一月十日	一月十日	陰	八日全治	二月
一四	横田利三郎	二九	醫學士	一月七日	一月八日	一月十一日	一月十一日	陽	十五日死亡	一月
一五	富川タミ	二五	醫療器械師妻	六月六日	六月六日		六月六日	陽	七日死亡	六月

前掲「ペスト」病患者表中、醫學士横田利三郎ハ、駒込病院醫員兼東京醫科大學助手ニシテ、「ペスト」病流行ニ際シ、本所病院醫員ヲ兼務シ、熱誠ニ收容患者ノ治療ニ從事中、不幸同病ノ侵ス處トナリ、壯齡有爲ノ資ヲ抱キ不起以テ一身ヲ其職ノ犧牲トナス。實ニ痛惜ニ堪ヘサル處ナリ。

〔參考〕日本傳染病小史ニ、

—ペスト豫防錄

千八百九十四年(〇明治廿七年紀元二五五四年)香港に「ペスト」の發生せる以來、千八百九十六年(〇明治廿九年紀元二五五六年)には病毒既に臺灣に侵入し、且つ日本と常に船舶を以て交通する清國福洲、厦門、及牛莊等にも、其流行を見るに至りしを以て、此等地方より日本に來たる船客船員中に「ペスト」患者を發見することも少からず。例へば千八百九十六年(〇明治廿九年紀元二五五六年)一英汽船の船客清國人は、横濱港(〇武藏國)に於て、又た千八百九十九年(〇明治廿二年紀元二五五九年)には臺灣より來れる一日本人は、廣島(〇安藝國)に於て「ペスト」と診定されしも、直ちに適當の豫防措置施行されしを以て、之れより他に病毒を蔓延せしむることなかりき。而るに千八百九十九年(〇明治廿二年紀元二五五九年)十一月に至り、神戸市(〇攝津國)に於て、一名の「ペスト」患者を發見せり。是れ同地に於て病毒に感染せるものにして、「ペスト」病毒は、遂に根據地を獲取したるなり。而して同年(〇明治廿二年紀元二五五九年)末に至る迄に、二十三人(内十九人死亡)の患者を出せしが、豫防宜しきを得、全く終熄を告けたり。

神戸(〇攝津國)に於ける病毒は、當時の調査によれば、初發患者の出入せる外國船より持ち運ばれたりと唱へられしも、實際同市(〇神戸市)に於て二ヶ月間に「ペスト」鼠を搜索し得たる數五十一頭にして、且つ七患者の家屋よりは何れも「ペスト」鼠を出せる處より見れば、病毒は寧ろ其以前に侵入し、鼠族間に傳播し、次て人體に及ぼせしものゝ如し。

神戸市(〇攝津國)に於ける「ペスト」患者發生と殆んと相前後して、千八百九十九年(〇明治廿二年紀元二五五九年)十一月二十日、大阪市(〇攝津國)内に於ても一名の「ペスト」患者發見せられ、次て續々患者を出し、翌千九百年(〇明治廿三年紀元二五六〇年)一月中旬迄に、四十一名の患者三十九人の死亡を出せり。而して此流行には「ペスト」肺炎の小流行あり。三名の醫師、及醫師の家族二三を斃したり。次て四月上旬(〇明治廿三年紀元二五六〇年)に至り、再び患者を續出し、七月(〇明治廿三年紀元二五六〇年)に至りて終熄せるも、其九十日間の患者五十名(死亡四十六名)。斯

くて盛夏の候は患者を出さざりしが、九月中旬(〇明治卅三年紀元二五六〇年)に至りて三度び患者を發生し、十二月(〇明治卅三年紀元二五六〇年)末迄に七十人(死亡六十一人)の患者を出せり。而して以上患者を發生せる地域内其他に於て、百二十六頭の「ペスト」鼠發見せられたり。斯の如く神戸・大阪(〇攝津國)の二市街地に「ペスト」の病毒根據を占めたるを以て、之れを中心として、和歌山縣湯淺町、靜岡縣濱松に蔓延し、合計患者三百三十人、死亡百九十八を出せり。次て千九百二年(〇明治卅五年紀元二五六二年)末より、同三年(〇明治卅六年紀元二五六三年)に亘りては、横濱(〇武藏國)及東京兩市の一部落に小流行を呈し、合計患者七十一人、死亡五十八人を出せり。

千九百四年(〇明治卅七年紀元二五六四年)の末より、第三回の流行として、神戸、大阪(〇攝津國)東京、山口(〇周防國)等に患者を發生し、途に千葉、香川、和歌山、廣島、德島、福岡、長崎、愛媛、奈良、福井、長崎の諸地方に散發するに至れり。神戸市(〇攝津國)に於ては千九百六年(〇明治卅九年紀元二五六六年)末に至る迄、斷えず患者及「ペスト」鼠を出し、其總數患者百五十六人(死亡百十四人)、「ペスト」鼠の數は實に二千九百五十四頭を算せり。大阪市(〇攝津國)に於ては尙ほ一層烈しく、患者二百七十四人(死亡二百二十二人)、「ペスト」鼠二千五百八十二頭を出せり。

和歌山、福岡、東京、横濱、其他の患者總數は、三百六十一人にして、即ち第三回の流行に於ては、總數七百九十一人の患者を出せり。而して「ペスト」鼠を檢出せざるは千葉、香川、奈良、福井、長野に過ぎず。香川縣下には三十二人の患者、千葉縣下には七人の患者を發生せしも、遂に「ペスト」鼠を檢出せざるは異常とせる所なり。思ふに此二小流行は、何れも腺「ペスト」或は小數の皮膚「ペスト」なれども、恰も夏季に於てせるを以て、直接蚤等の媒介によりて、人體間に傳染を起せしものならん。奈良、福井、長野に於けるは、何れも唯だ一人の患者にして、大阪(〇攝津國)或は神戸(〇攝津國)の流行地に於て感染し、此等地方に到りて發患せるに過ぎず。

此疫ニ於ケル警視廳東京府等ノ措置ハ、警視廳東京府公報ニ左ノ如ク見ユ。(衛生史參看。)

警視廳告諭第五號

今般神奈川縣下ニ「ペスト」疑似症發生セシニ付テハ、左ニ掲クル事項ヲ守リ、豫防方一層注意ヲ加フヘシ。

明治三十五年(〇紀元二五六二年。)十月十日　警視總監　大浦兼武

東京府知事男爵　千家尊福

一、鼠族ハ「ペスト」病毒傳播ノ媒介ヲ爲スモノニシテ、豫防上最モ警戒スヘキモノナルニ付、各戸ニ於テ力メテ之ヲ驅除スルコト。

二、斃鼠ノ發見ニハ特ニ注意ヲ加ヘ、之ヲ發見シタルトキハ、明治三十二年(〇紀元二五九九年。)十二月警視廳令第二十九號ニ依リ、警察官吏ニ屆出ツルコト。

三、鼠族ハ手ヲ觸レス、箸類ヲ以テ之ヲ取扱ヒ、且鼠族ニ附着セル蚤ノ人體ニ

移附セサル樣注意シ、箸類ハ使用後直ニ燒却スルコト。

四、家屋ノ内外ハ常ニ清潔ニスルコト。

五、豫防上跳足ヲ戒ムルハ勿論、苟モ手足ニ傷損アルモノハ、速ニ相當手當ヲ爲スコト。

警視廳告諭第五號參照。警視廳令第二十九號。

家屋若ハ宅地内ニ於テ鼠ノ屍體ヲ發見シタル者ハ、消毒前速ニ書面又ハ口頭ヲ以テ警察官署、警察官吏又ハ檢疫委員ニ申告スヘシ。

本令ニ違犯シタル者ハ、一圓以下ノ科料ニ處ス。

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス。

東京府訓令第四十五號

今般神奈川縣下ニ於テペスト疑似症發生シ、豫防上最モ警戒スヘキ儀ニ付、郡役所、市役所、町村役場

明治三十二年（紀元二五五九年）十一月東京府訓令第四十二號ニ依リ、尙ホ鼠族ノ驅除ニ關シテハ、明治三十四年（紀元二五六一年）五月東京府訓令第十九號ニ準據シ、豫防上遺策ナキヲ期スヘシ。

明治三十五年（紀元二五六二年）十月十日　東京府知事男爵　千家尊福

警視廳告示第百八十二號

「ペスト」病豫防ノ爲、神奈川縣下ヲ發シ、若ハ通過シ來ル船舶ニ對シ、品川沖第二臺場附近ニ於テ十月十三日（明治卅五年（紀元二五六二年））ヨリ船舶檢疫ヲ施行ス。

明治三十五年（紀元二五六二年）十月十三日　警視總監　大浦兼武

警視廳告示第百八十三號

「ペスト」豫防ノ爲神奈川縣下ヲ發シ、若クハ通過シ來ル汽車ノ乘客ニ對シ、左ノ停車場ニ於テ十月十三日（明治卅五年（紀元二五六二年））ヨリ汽車檢疫ヲ施行ス。

明治三十五年（紀元二五六二年）十月十三日　警視總監　大浦兼武

一、荏原郡入新井村大森停車場（武藏國）

一、芝區品川停車場（市内）

一、芝區新橋停車場（市内）

警視廳訓令乙第五號

ペスト病豫防ノ爲、各戸ヲシテ力メテ鼠族ヲ捕獲セシムル樣便宜奬勵ノ方法ヲ設ケ、其ノ旨具申スヘシ。

各戸ニ於テ捕獲シタル鼠ハ、適宜取集メ燒却スヘシ。

市役所、町村役場

右訓令ス。

明治三十五年〇紀元二五六二年。十月十五日　警視總監　大浦兼武

一、警視廳東京府訓令號外　警察署、郡役所、區役所、町村役場　西、南、北ノ三多摩郡ヲ除ク。

「ペスト」病豫防ノ爲、當分ノ内死亡者調査手續左ノ通定ム。

明治三十五年〇紀元二五六二年。十二月三十日　警視總監　大浦兼武　東京府知事男爵　千家尊福

一、區役所、町村役場ハ埋火葬證下附願アリタルトキハ、直ニ警察署ニ通知スヘシ。

二、警察署ニ於テ、前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ、檢疫委員又ハ市町村醫ヲシテ死體ヲ檢案セシメ、「ペスト」ノ疑ナシト檢案シタルトキハ、埋火葬證ヲ下附シテ差支ナキコトヲ、區役所、町村役場ニ急報スヘシ。

三、警察官署ハ、前項ニ依リ取扱ヒタル數ヲ左ノ樣式ニ依リ第三部ニ日報スヘシ。

樣式〇略。

警視廳告諭第一號

一、客年〇明治卅五年、紀元二五六二年。十二月二十四日本所區押上町〇市内。東京瓦斯紡績株式會社ノ工女「ペスト」ニ罹リ、爾來同會社ニ寄宿セル工女間ニ續發シ、總數十三人ニ上レリ。元來「ペスト」ハ、鼠族ニ特別ノ傳染力ヲ有スル疾病ニシテ、鼠族ノ該病ニ罹ルトキハ、其ノ病毒ヲ傳播セシメ、延ヒテ人身ニ傳播セシムルモノナルヲ以テ、鼠族ニシテ該病毒ヲ存スルノ事實アルトキハ、其危險最モ甚シトス。今ヤ幸ニ新患者ノ發生ヲ見スト雖モ、該病發生地タル會社ノ構内及本所區太平町、中ノ郷業平町、中ノ郷竹町等ニ於テ、續續該病毒ヲ有スル斃鼠及捕鼠ヲ發見セルノ事實ニ徵スレバ、病毒ノ鼠族間ニ蔓延セルコト、其ノ區域狹小ナラス、隨テ何時人身ニ傳染セシムルノ機會ヲ與フルヤモ測ラレス、就テハ此際宜シク一般ニ鼠族ノ捕獲殲滅ヲ謀リ、病毒ヲ根絶スルコトヲ努メ、凡ソ鼠族ノ出入生息スルノ虞アル個所ニ就テハ、嚴密ナル警戒ヲ加ヘサルヘカラス、縱令新患者發生セスト雖、該病毒ヲ有スル鼠族ノ絶滅セサル限リハ、該病ノ豫防消毒ニ關シテ、各自充分ナル注意ヲ怠ルヘカラス。

明治三十六年〇紀元二五六三年。一月二十三日　警視總監　大浦兼武

警視廳告示第二十三號

一、ペスト豫防ノ爲、東京市ニ於テ左記ノ地域內各戸ニ對シ、別紙ノ手續ニ依リ、淸潔方法ヲ施行スヘキニ付、之カ準備竝施行ノ日割等ハ、警察官吏又ハ當該吏員ノ指示ニ從フヘシ。東京市內ニシテ必要ト認タル場所ハ、左記ノ地域外ト雖モ、猶別紙ノ手續中必要ノ事項ニ限リ、東京市ニ於テ之ヲ施行スルコトアルヘシ。此ノ場合ニ於テハ別ニ之ヲ告示ス。

明治三十六年〇紀元二五六三年。二月七日　警視總監　大浦兼武

一、東京市本所區內、東ハ天神川、西ハ横川、南ハ錦糸堀、北ハ中ノ鄕業平町百八十二番地ヨリ以東柳島元町百六十六番地ニ至ル地域內。

（別紙）淸潔方法施行手續

第一　地域內ニ於ケル鼠族ノ遁逸ヲ防ク爲、適當ノ高サヲ有スル「トタン」或ハ「ブリキ」板ヲ以テ、全地域ヲ取リ圍ムモノトス。

第二　河岸地大下水ニ對シテハ、鼠族ノ逸出ヲ防ク爲、鼠族ノ通路トナルヘキ孔穴ヲ封鎖スルコト。

第三　地域內ハ再ヒ小區劃ニ分チ、順次淸潔方法ヲ行ヒ斃鼠アリタル家宅內及不潔ナル場所、其ノ他必要ト認ムル場所及物件ニ對シテハ、消毒方法ヲ施行スルコト。

第四　小區劃ニ於ケル淸潔方法ハ、左ノ如シ。

一、一定區劃內ノ淸潔方法ヲ行フ際ニハ、其區劃內鼠族ノ逸出ヲ防ク爲、其ノ周圍ヲ「トタン」或ハ「ブリキ」板ニテ取リ圍ムコト。

二、淸潔方法ヲ行フヘキ豫定ノ區劃內ニハ、一兩日前ヨリ殺鼠劑、或ハ捕鼠器ヲ配置シ、成ルヘク驅鼠方法ヲ厲行スルコト。

三、家屋內外ノ塵芥ヲ掃除シ、即日之ヲ燒却スルコト。

四、疊ヲ上ケ、根太板ノ一部ヲ取外シ、鼠族ヲ搜索スルコト。

五、天井板ハ二ケ所ニ人ノ出入シ得ラルヽ丈ケ板ヲ取外シ、燈火ヲ以テ鼠族ヲ搜索シ、且天井裏ノ塵芥ヲ取リ除クコト。

六、押入、戸棚等ハ諸物品ヲ取リ出シ、鼠族ヲ搜索スルコト。

七、下水溝ハ下水蓋ヲ取外シ、鼠族ヲ搜索シ、且塵芥ヲ取除クコト。

八、其他鼠ノ通路ヲ發見シタルトキハ、羽目板ノ一部ヲ取外シ、鼠族ヲ搜索スルコト。

九、鼠族ノ捜索ヲ了セバ、床下ニハ石灰乳ヲ撒布スルコト。

十、倉庫及物置ニ對シテハ、收容セル物品ニ依リ、特ニ相當ノ方法ヲ以テ鼠族ノ捜索ヲ行フコト。

警視廳告示第二十八號

明治三十六年二月（紀元二五六三年）警視廳告示第二十三號末段ノ場所ハ左ノ通トス。

明治三十六年二月十二日　警視總監　大浦兼武

一、本所區（明治三十六年二月警視廳告示第二十三號所定ノ地域ヲ除ク。）

二、深川區

三、淺草區

警視廳告示第四十四號

明治三十六年二月（紀元二五六三年）警視廳告示第二十八號淺草區ノ次ニ、左ノ通追加ス。

明治三十六年五月十二日（紀元二五六三年）　警視總監　大浦兼武

四、神田區ノ內市內ノ內神田川以北。

五、下谷區內市內。

警視廳告示第八十八號

明治三十六年二月（紀元二五六三年）警視廳告示第二十八號ニ、左ノ通追加ス。

明治三十六年五月十四日（紀元二五六三年）　警視總監　大浦兼武

六、神田區內市內ノ內神田川以南。

七、日本橋區內市內。

八、京橋區內市內。

警視廳告示第百四號

明治三十六年二月（紀元二五六三年）警視廳告示第二十三號及第二十八號、本日（明治卅六年（紀元二五六三年）六月廿日）限廢止ス。

明治三十六年五月二十日（紀元二五六三年）　警視總監　大浦兼武

明治卅五年實布埜里亞　東京府統計書、東京市統計年表等ニ據レハ、

實布埜里亞（明治卅五年（紀元二五六二年））

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	九四	一三	神田	八二	一八
日本橋	五五	九	京橋	六五	一二
芝	一二九	一八	麻布	七〇	一〇
赤坂	六〇	七	谷	一九	五

牛込	六六	一二	小石川	三二	八
本郷	六三	一一	下谷	八五	一八
淺草	一五三	二八	本所	九一	二二
深川	六一	一八	市	一二五	二〇九

附記　明治卅五年腸窒扶斯其他

〔附記〕明治卅五年〇紀元二五六二年。東京市ニ於ケル腸窒扶斯其他ハ、〇東京府統計書。

腸窒扶斯患者八七八、死者二四九。　赤痢患者　三二四、死者七四。
猩紅熱患者　五四、死者二。　虎列刺患者　三、死者三。
痘瘡患者　九。

明治卅六年〇紀元二五六三年。東京市ニ於ケル腸窒扶斯其他左ノ如シ。東京府統計書ニ據ル。

明治卅六年腸窒扶斯其他

腸窒扶斯患者　七七二、死者二一八。　實布埜里亞患者　七一八、死者一八六。
赤痢患者　三六八、死者九七。　猩紅熱患者　四八、死者二。
痘瘡患者　三、死者一。

明治卅七年腸窒扶斯

明治卅七年〇紀元二五六四年。東京市腸窒扶斯流行シ、患者一千六百四十九人死者四百八十人ヲ出ス。〇東京府統計書。

明治卅七年腸窒扶斯事蹟

明治卅七年腸窒扶斯　東京府統計書ニ據レハ、明治卅七年〇紀元二五六四年。ノ東京腸窒扶斯ハ、八月九月七月十月六月十一月〇明治卅七年紀元二五六四年。等ヲ中心トシテ、全年ニ流行シ、府内患者二千四十八人内市内一千六百四十九人、死者五百七十九人内市内四百八十人有リ。即チ腸窒扶斯〇明治卅七年紀元二五六四年。

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	八八	一七	神田	一一四	二八
日本橋	五七	一七	京橋	一〇四	三九
芝	九八	三九	麻布	三四	九
赤坂	二〇	五	四谷	二一	五
牛込	六一	一六	小石川	一三七	二三
本郷	一七五	四五	下谷	一二二	三九
淺草	三七五	一三	本所	一九八	四九
深川	四五	一九	市	一六四九	四八〇

附記　明治卅七年實布埜里亞其他

〔附記〕明治卅七年〇紀元二五六四年。東京市ニ於ケル實布埜里亞其他ハ、東京府統計書ニ、左ノ如ク見ユ。

實布埜里亞患者　八六四、死者　二二二。　赤痢患者　四六〇、死者　一二〇。

猩紅熱患者　五九、死者　七。　痘瘡患者　一四、死者　一。
發疹窒扶斯患者　一、死者　一。

明治卅八年ペスト

卅八年（明治二五六五年。紀元）ペスト再ビ東京市深川本所二區ニ行ハル。四月十四日（明治卅八年元二五六五年。紀）深川區蛤町一町目（市内。）ニ發生シタルヲ始トシ、七月十七日（明治卅八年元二五六五年。紀）本所區林町三町目（市内。）ニ患者ヲ出シテ熄止ス。患者十五人、死者十二人也。（ペスト豫防錄。）是年（明治卅八年紀元二五六五年。）腸窒扶斯亦流行シ、患者一千八十八人、死者三百八人ヲ出ス。（東京市統計年表。東京府統計書。）

明治卅八年腸窒扶斯

明治卅八年ペスト事蹟

明治卅八年ペスト　ハ、東京市ニ於テ第二回ノ發生也。ペスト豫防錄云フ、「ペスト」病ハ、鼠族ト至大ノ關係ヲ有スルヲ以テ、三十二年（明治二五五九年。紀元）大阪市ニ於テ「ペスト」病發生ノ當時ヨリ、細菌檢査ヲ開始セシメタリ、然ルニ明治三十八年二月十二日ニ至リ、深川區捕鼠中ノ一頭ハ、細菌檢査ノ結果「ペスト」鼠ナルヲ認メタルヲ以テ、直チニ之レヲ警視廳ニ通牒シ、同廳第三部ハ、檢疫醫ヲ派シ來リ、檢査ノ上「ペスト」鼠タルコトニ確定セリ、是レ實ニ明治卅八年二月十八日ニシテ、本年（明治卅八年元二五六五年。紀）ニ於ケル「ペスト」鼠ノ初發ナリトス。是ヲ以テ二月二十三日（明治卅八年元二五六五年。紀）其發見地ニ就キ實況ヲ調査シ、黑江町（市内深川區。）外十八ケ所ニ於テ、戸數四百三十五戸及倉庫三棟二十五戸前ニ對シ、一齊ニ消毒的清潔方法ヲ施行セリ。

爾來二月二十三日（明治卅八年元二五六五年。紀）深川區大島町七十八番地（市内。）地先ヨリ捕獲セル捕鼠五頭中ノ一頭ハ、檢査ノ結果「ペスト」鼠ト確定シ、尋テ同區（市内深川區。）富岡門前山本町十五番地牛乳商植木清藏方ニ於ケル五頭ノ捕鼠ハ、悉ク「ペスト」鼠タリシノミナラズ、斷ヘズ續發シ、終ニ本年（明治卅八年元二五六五年。紀）十一月六日迄ニ、七十六頭ノ「ペスト」鼠ヲ發見スルニ至レリ。而シテ四月十八日（明治卅八年紀元二五六五年。）屆出ニ係ル深川區蛤町一丁目四番地（市内。）尾崎タミヲ初發トシ、七月廿日（明治卅八年元二五六五年。紀）小倉ハツヲ最後トシ、總數十五名ノ患者ヲ出シ、一旦終熄ヲ見ルニ至ル。

三十八年（明治二五六五年。紀元）二月中、深川區（市内。）ニ於テ有菌鼠ヲ發見（第三章第二節參照）セシ以來、百方之カ豫防ニ努メタルニモ拘ハラス、同年（明治卅八年紀元二五六五年。）四月十四日深川區蛤町（市内。）ニ一患者ヲ出シ、爾後幾モナク同區（市内深川區。）及

本所區○市内。内ニ患者ヲ續發シ、遂ニ十五名ナル多數患者ヲ出シ、七月下旬○明治卅八年(紀元二五六五年)。ニ至リ終息ヲ見ルコトヲ得タリ。是ヲ本市○東京市。ニ於ケル第二回ノ流行ナリトス。○中略。

三十八年「ベスト」病患者一覽表

號	氏名	年齢	職業	發病月日	届出月日	發見事由	細菌檢査	決定 疑似	決定 眞症	療養所	轉歸 全治	轉歸 死亡
一	尾崎タミ	一二	小學生徒	四月十四日	四月十八日	檢死	體檢	四月十九日	四月廿四日	自宅	—	四月十八日亡
二	中久喜長次郎	一二	同	五月八日	五月九日	診斷	體檢	五月十一日	五月十一日	病院	—	五月十日亡
三	玉井トキ	三二	洋物商妻	五月十七日	五月廿二日	檢死	體檢	五月廿二日	五月廿二日	自宅	—	五月廿一日亡
四	淺名庫吉	一〇	小學生徒	五月十八日	五月廿四日	檢死	體檢	五月廿四日	五月廿四日	自宅	—	五月廿四日亡
五	湯淺金八	四	無實業	五月廿三日	五月廿六日	檢死	體檢	五月廿六日	五月廿八日	自宅	—	五月廿六日亡
六	田中ヨシ	九	車力業	五月廿三日	五月廿六日	診斷	康斷	五月廿七日	五月廿八日	病院	七月廿八日全治退院	—
七	黑田六太郎	三三	帽子商	五月廿八日	五月廿九日	診斷	康斷	五月廿九日	五月三十日	病院	八月十二日全治退院	—
八	田中兼太郎	一二	漁實父	五月十日	五月三十日	檢死	體檢	五月三十日	五月廿一日	自宅	—	五月三十日亡
九	並木ヨシ	六二	小揚實業子	六月六日	六月六日	檢死	體檢	六月六日	六月九日	自宅	—	六月六日亡
一〇	荒川謙之助	五六	深川警察署小使	六月五日	六月七日	診斷	康斷	六月七日	六月九日	病院	—	六月八日亡
一一	早川正太郎	二五	大工	六月七日	六月九日	檢死	體檢	六月十日	六月十日	自宅	—	六月十日亡
一二	高森常藏	一六	酒店雇人	六月十五日	六月十七日	診斷	康斷	六月十七日	六月十七日	病院	九月六日全治退院	—
一三	四村久次郎	一六	米穀商雇人	七月十四日	七月十八日	診斷	康斷	七月十九日	七月十九日	病院	七月十九日亡	七月廿二日亡
一四	成井ハツ	一一	繼子	七月十七日	七月十九日	診斷	康斷	七月廿一日	七月廿一日	病院	七月廿日亡	七月廿日亡
一五	小倉ツネ	九	繼續實父商	七月十七日	七月廿日	診斷	康斷	七月二十日	七月二十日	病院	七月廿四日亡	七月廿二日亡

明治卅八年腸窒扶斯事蹟

明治卅八年腸窒扶斯 ハ、九月八月十一月十月七月十二月及五月○明治卅八年(紀元二五六五年)。ヲ主トシテ、周年ノ流行ヲ見タル所ノ者、府内ノ患者一千五百四十九人、内市部ノ患者一千八十八人也。而シテ府内ノ死者四百十四人、内市部ノ死者三百八人有リ。東京市統計年表及東京府統計書ニ據リ、左ニ各區ノ患者死者ヲ擧グ。

腸窒扶斯○明治卅八年(紀元二五六五年)

區	患者	死者
麴町	七	三
神田	一一五	四

附記　明治卅八年實布埜里亞其他

明治卅九年腸窒扶斯

明治卅九年實布埜里亞

明治卅九年腸窒扶斯事蹟

〔附記〕明治卅八年（紀元二五六五年。）東京市ニ於ケル實布埜里亞其他ハ、東京市統計年表東京府統計書等ニ據レハ、左ノ如シ。

實布埜里亞患者　九六六、死者　二二五。　赤痢患者　二七八、死者　七七。

猩紅熱患者　六二、死者　七。　痘瘡患者　五。

卅九年（明治卅九年（紀元二五六六年。））東京市腸窒扶斯行ハレ、患者一千四百九十八人、死者四百廿七人有リ。同時ニ實布埜里亞亦患者一千五十九人、死者二百廿八人ヲ出ス。（東京府統計書。東京市統計年表。）

明治卅九年腸窒扶斯　東京府統計書東京市統計年表等ニ據ルニ、九月八月十月七月十一月五月十二月六月（明治卅九年（紀元二五六六年。））ヲ中心トシテ流行シ、東京府内ニ於テ患者一千九百七十二人死者五百六十一人ヲ出シ、内市部ニ於テ患者一千四百九十八人死者四百廿七人ヲ出シタリ。即チ腸窒扶斯（明治卅九年（紀元二五六六年））

區	患者	死者	區	患者	死者
麴町	八四	一四	神田	一五二	三八
日本橋	七〇	一五	京橋	八九	二六
芝	一三九	三〇	麻布	七一	一九
赤坂	三八	一〇	四谷	三二	八
牛込	一〇七	二二	小石川	一二三	四一
本郷	一五〇	三二	下谷	八九	二九
淺草	一八一	七一	本所	一一六	五一
深川	五七	二二	市	一四九八	四二七

明治卅九年實布埜里亞事蹟

明治卅九年實布埜里亞ハ、府内ノ患者一千三百六十六人、死者三百廿五人、内市部ノ患者一千五十九人、死者二百廿八人有リ、流行ハ全年ニ亘リ殊ニ三月四月十二月二月五月一月十一月六月（明治卅九年（紀元二五六六年。））ニ多クノ患者ヲ出シタルコト東京府統計書東京市統計年表ニ載ス。内市内ノ患者死者左ノ如シ。

日本橋	七四	一五	京橋	八一	二三
芝	八二	二一	麻布	四八	一一
赤坂	三四	九	四谷	四六	一六
牛込	八七	二八	小石川	一〇二	二六
本郷	九八	二四	下谷	六〇	一六
淺草	一〇六	三七	本所	六七	二四
深川	三七	一七	市	一〇八八	三〇八

寳布埜里亞

○明治卅九年（紀元二五六六年）

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	六一	五	神田	八八	一八
日本橋	四三	九	京橋	四六	九
芝	一一三	二〇	麻布	五五	一二
赤坂	三六	六	四谷	三四	一三
牛込	五一	九	小石川	七二	一一
本郷	八二	一五	下谷	八八	二一
淺草	一二五	二七	本所	八七	二四
深川	七八	二九	市	一〇五九	二二八

〔附記〕明治卅九年（紀元二五六六年）東京市内ニ於ケル赤痢其他ノ流行亦、東京府統計書・東京市統計年表等ニ左ノ如ク見ユ。

赤痢患者　三九八、　死者　一一五。

猩紅熱患者　一三四、　死者　一五。

痘瘡患者　一。

附記　明治卅九年赤痢其他

四十年（明治四十年（紀元二五六七年））東京市腸窒扶斯流行シ、一千二百八十五人ノ患者、三百五十五人ノ死者ヲ出ス。是歳（明治四十年（紀元二五六七年））實布埜里亞

明治四十年腸窒扶斯

亦患者一千五十四人、死者二百九十人有リ。（東京府統計書。東京市統計年表。）

明治四十年腸窒扶斯事蹟

明治四十年腸窒扶斯　東京府統計書・東京市統計年表ニ據レハ、左ノ如シ。

腸窒扶斯（明治四十年（紀元二五六七年））

區	患者	死者	區	患者	死者
麹町	四二	一〇	神田	一二四	三三
日本橋	七三	一三	京橋	九〇	三〇
芝	一三七	三三	麻布	五三	一九
赤坂	五三	九	四谷	三八	五
牛込	八〇	一一	小石川	一一一	二二
本郷	一一六	三三	下谷	八七	二五
淺草	一六四	五九	本所	六二	三一
深川	五五	二二	市	一二八五	三五五

東京府郡部ヲ合スレハ、患者一千八百四十六人、死者四百九十八人ニシテ九月八月十月七月十一月六月四月（明治四十年（紀元二五六七年））ヲ中心トシ、全年ニ流行ス。

明治四十年寳布埜里亞事蹟

明治四十年寳布埜里亞

東京府統計書・東京市統計年表ニ據レハ、

附記 明治四十年赤痢其他

區	患者	死者	區	患者	死者
麴町	六五	七	神田	九八	二九
日本橋	五八	一九	京橋	六一	一六
芝	一〇〇	一四	麻布	五二	九
赤坂	二一	一	四谷	三三	八
牛込	五二	一五	小石川	六一	二八
本郷	四七	一三	下谷	八一	二五
淺草	一一七	三九	本所	一〇三	三五
深川	四九	三二	市	一〇五四	二九〇

東京府郡部ヲ合スレバ、患者一千四百四十一人、死者四百廿四人也。流行全年ニ亘ルト雖、三月十二月四月一月二月〇明治四十年(紀元二五六七年)。等ヲ殊ニ患者多シト爲ス。

〔附記〕明治四十年〇紀元二五六七年。東京市ノ赤痢其他ハ、東京府統計書東京市統計年表等ニ據レハ左ノ如シ。

赤痢患者 三三一、死者 七五。 虎列刺患者 一〇五、死者 八三。

猩紅熱患者 二二三、死者 二六。 痘瘡患者 三。

外ニ「ペスト」患者一人有リ。

七月二日〇明治四十年(紀元二五六七年)。ニ至リ、本所區役所ノ取扱ニ係ル行旅病者諸橋丑五郎ハ、養育院ヘ收容ノ際、「ペスト」病患者ナルコトヲ發見セルニ依リ、本所病院ヲ臨時ニ開院シ、之ヲ收容スルト同時ニ、之カ關係人ハ、同院內隔離所ニ隔離シ、其家屋ニ對シテハ、關係ノ深淺ヲ測リ、消毒及清潔方法ヲ施行シ、以テ豫防上ノ措置ヲシテ遺憾ナカラシメタリ。而シテ該病患者ハ、橫濱〇武藏國。ニテ發病シ來リタルモノニシテ、本市〇東京市。ニ於テ發生セシモノニアラズ。幸ニ同人ハ治療其効ヲ奏シ、全治セルヲ以テ、九月三十日〇明治四十年(紀元二五六七年)。解放シ、臨時病院ヲ閉鎖セリ。

〔參考〕東京ノ疫癘

天正十八年〇紀元二五〇年。ヨリ明治四十年〇紀元二五六七年。ニ至ル三百十八年ノ間、東京ノ地ニ流行シタル疫癘ノ重ナル者ヲ表示スレバ、左ノ如シ。

年代	疫癘	年代	疫癘	年代	疫癘
天正十八年(三五〇年)	眼病	慶長六年(三六一年)	疫病	慶長十二年(三六七年)	痘瘡
慶長十五年(三七〇年)	疫癘	元和二年(三七六年)	麻疹	元和五年(三七九年)	痘瘡
寛永八年(三九一年)	痘瘡。疥癬。	慶安二年(三〇九年)	麻疹	承應二年(三〇三年)	痘瘡。水痘。

承應三年(一三五四年)	瘡瘡。水瘡。	貞享元年(一三四四年)
元祿十二年(一三九九年)	古呂利	元祿十三年(一三六〇年)
寶永五六年(一三六八年)(一三六九年)	麻疹。瘡瘡。	正德四年(一三七四年)
正德六年(一三七六年)	疫病	享保十三年(一三八八年)
享保十八年(一三九三年)	風病	享保廿年(一三九五年)
元文二年(一三九七年)	熱病	元文五年(一四〇〇年)
延享四年(一四〇七年)	風邪	寶曆三年(一四一三年)
明和六年(一四一九年)	風邪	明和九年(一四二三年)
安永五年(一四二六年)	風邪。麻疹。	安永八九年(一四二九年)(一四三〇年)
天明二年(一四三二年)	瘡瘡	天明四年(一四三四年)
寬政七年(一四三五年)	風邪	寬政十一年(一四三九年)
享和三年(一四四三年)	麻疹	文化三年(一四四六年)
文化八年(一四一七年)	風邪	文化十三年(一四一七年)
文政四年(一四八一年)	風邪。疫疾。	文政五年(一四八二年)
文政八年(一四八五年)	瘡瘡	文政十年(一四八七年)
天保二年(一四九一年)	感冒	天保三年(一四九二年)
天保七年(一四九六年)	麻疹	天保八年(一四九七年)
嘉永三年(一五〇一年)	風邪	嘉永四年(一五〇二年)
嘉永七年(一五〇四年)	風邪。瘡瘡。	安政四年(一五〇七年)

元祿四年(一三五一年)	麻疹	安政六年(一五〇九年)
寶永四年(一三六七年)	咳嗽	文久二年(一五二三年)
正德五年(一三七五年)	瘡瘡	明治三年(一五三〇年)
享保十五年(一三九〇年)	麻疹。鍋冠。	明治十年(一五三七年)
享保廿一年(一三九六年)	瘡瘡	明治十五年(一五四二年)
寬保四年(一四〇四年)	瘡瘡。風病。	明治十二年(一五四九年)
寶曆十三年(一四一三年)	瘟疫	明治十五年(一五五二年)
安永二年(一四三三年)	疫癘	明治廿年(一五五六年)
天明元年(一四四一年)	風邪	明治廿七年(一五六四年)
寬政四年(一四五二年)	百日咳	明治四十年(一五七七年)
享和二年(一四六二年)	風邪	萬延元年(一五一〇年)
文化五年(一四六八年)	風邪	文久三年(一五二三年)
文政二年(一四七九年)	風疾。痢疾。	明治六年(一五三三年)
文政七年(一四八四年)	麻疹。風邪。	明治十二年(一五三九年)
文政十三年(一四九〇年)	時疫	明治十八年(一五四五年)
天保六年(一四九五年)	風邪。風疹。	明治廿三年(一五五〇年)
弘化三四年(一五〇六年)(一五〇七年)	瘡瘡	明治廿六年(一五五三年)
嘉永五年(一五一二年)	暑疫	明治廿年(一五五七年)
安政五年(一五一八年)	虎狼利。風邪。	明治廿三年(一五六〇年)

安政六年(一五一九年)	麻疹。狼虎利。風邪。	文久元年(一三五一年)
文久二年(一五二三年)	麻疹。暴瀉病。	慶應三年(一五二七年)
明治三年(一五三〇年)	麻疹。風疹。	明治七年(一五三四年)
明治十年(一五三七年)	虎列刺	明治十四年(一五四一年)
明治十五年(一五四二年)	虎列刺	明治十九年(一五四六年)
明治廿二年(一五四九年)	腸窒扶斯	明治廿四年(一五五一年)
明治廿五年(一五五二年)	瘡瘡。腸窒扶斯。	明治廿八年(一五五五年)
明治廿九年(一五五六年)	瘡瘡。腸窒扶斯。實布垤里亞。	明治廿一年(一五五八年)
明治廿二年(一五五九年)	腸窒扶斯	明治廿五年(一五六二年)(一五六三年)
明治廿七年(一五六四年)	腸窒扶斯。實布垤里亞	明治廿八年(一五六五年)
明治四十年(一五七七年)	腸窒扶斯。	明治廿九年(一五六六年)

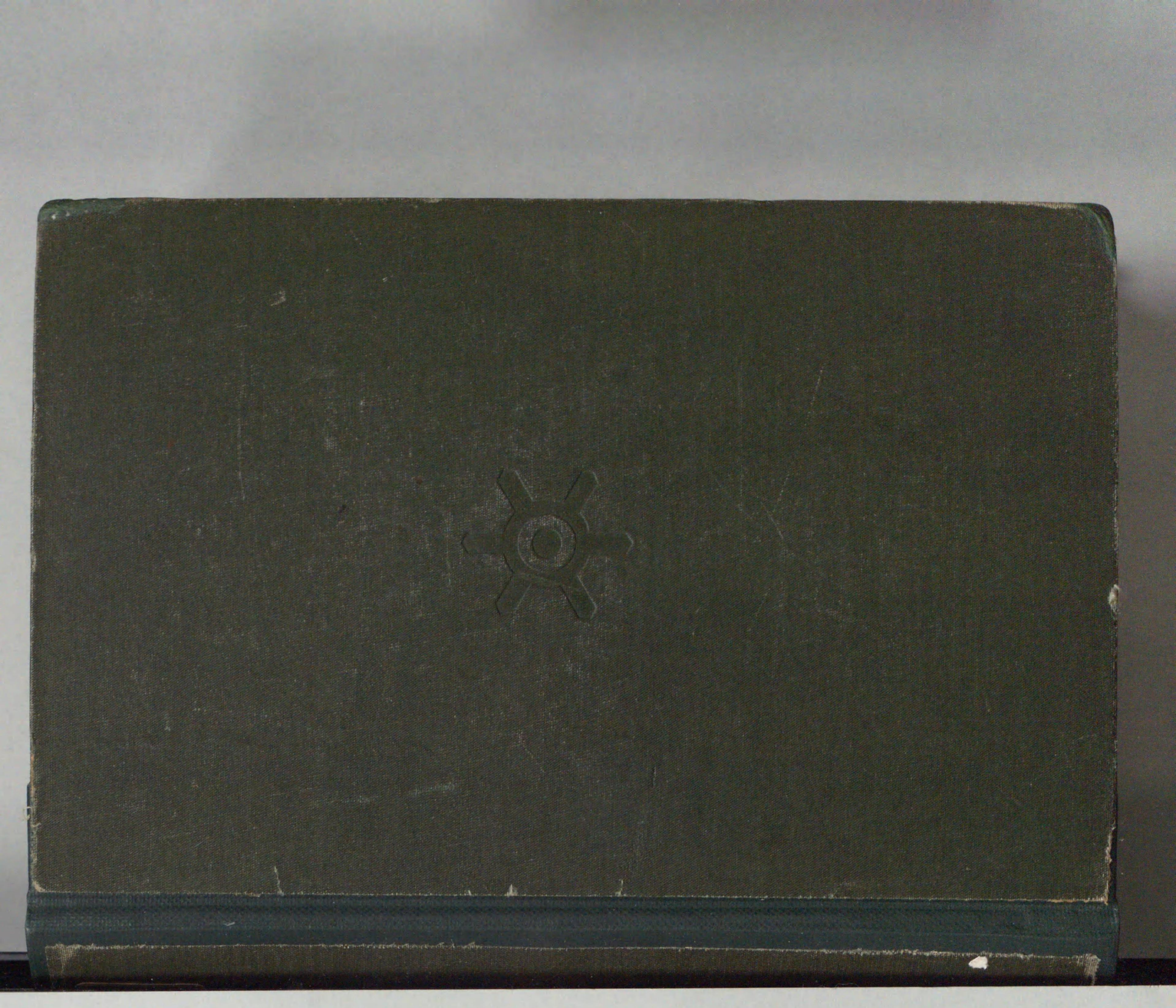
文久元年(一三五一年)	瘡瘡。傷寒。熱病。眼病。	元祿四年(一三五一年)
慶應三年(一五二七年)	風邪	寶永四年(一三六七年)
明治七年(一五三四年)	瘡瘡	正德五年(一三七五年)
明治十四年(一五四一年)	腸窒扶斯。發疹窒扶斯	享保十五年(一三九〇年)
明治十九年(一五四六年)	虎列刺。腸窒扶斯。	享保廿一年(一三九六年)
明治廿四年(一五五一年)	腸窒扶斯。	寬保四年(一四〇四年)
明治廿八年(一五五五年)	虎列刺。腸窒扶斯。	寶曆十三年(一四一三年)
明治廿一年(一五五八年)	實布垤里亞腸窒扶斯。	安永二年(一四三三年)
明治廿五年(一五六二年)(一五六三年)	ペスト。實布垤里亞。	天明元年(一四四一年)
明治廿九年(一五六六年)	腸窒扶斯。實布垤里亞	寬政四年(一四五二年)
		享和二年(一四六二年)
		文化五年(一四六八年)
		文政二年(一四七九年)
		文政七年(一四八四年)
		文政十三年(一四九〇年)
		天保六年(一四九五年)
		弘化三四年(一五〇六年)(一五〇七年)
		嘉永五年(一五一二年)
		安政五年(一五一八年)

東京市史稿變災篇第三畢

大正五年三月十日印刷
大正五年三月十三日發行

著作權所有

編纂兼發行者　東京市役所

印刷者　東京市京橋區鈴木町二番地　石丸鶴吉

印刷所　東京市京橋區鈴木町二番地　東亞印刷株式會社
電話京橋二二四二二五